
リリカルなのは 誰もが謳う正義

ネコ削ぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルなのは 誰もが謳う正義

【Nコード】

N1283T

【作者名】

ネコ削ぎ

【あらすじ】

大空を飛び回る。大地を縦横無尽に走り回る。組織の変革。地上の安定。自分を陥れた者への復讐。誰もが自分勝手な正義を謳い、意にそぐわぬ他者を退ける。

月島 桜の第二の人生のキャラや設定を一部使った再構成モノ。

誰もが想いを抱いて（前書き）

最初だから

誰もが想いを抱いて

なのはちゃん、ウチな、自分の部隊が持ちたいんや。もし、ウチが部隊を創ったらなのはちゃん、協力してくれへん？

いいよ、はやてちゃん。はやてちゃんの部隊なら喜んで協力するの。

私も手伝うよ、はやて。

ありがとな、フェイトちゃん。

名前を呼んだら友達だよ。

なのは

フェイトちゃん

なのは

フェイトちゃん

桜さん、陸に行くの？

なのはが空を飛びたいように、私は陸を走りたい。詰まりはそういうことです。

どいつもこいつも分かっていない。魔導師不足の現在、質量兵器の復活が必要だ。オーリス、オマエにも色々してもらおう。

分かりましたレジアス中将。

高町なのはを潰せるなら、陸だろうが何だろうが構いません。仲間潰しのハグルト、その名の通りにしてやります。

レイアーノ・レクリエ、特殊戦闘技術強攻部隊副隊長に就任します。よろしくな。

目指すは最強。鬼道 暁様のお通りだ。

白と黒と桜の決別（前書き）

待ってた人もそうでない人もお待たせしました。期待なんてしてないでしょうが。

白と黒と桜の決別

ミッドチルダのとある喫茶店で1人の少女が2人がけの席でコーヒ
ーを飲んでいた。

時間帯は昼間を少し過ぎて、少女は若干の空腹感を覚えていた。

何か食べ物を注文をすれば良いのだが、少女はこの場所で知り合い
と待ち合わせをしていたので、注文はせずに待っていた。

しかし知り合いは昼間が過ぎても現れない。すでにコーヒーは三杯
目を終えてしまった。店員の人がおかわりを注いでくれる度に少女
は気まづくなっていた。

「遅い」

少女の苛々が言葉に乗せられ発せられる。

テーブルに備え付けられているメニューを眺め気を紛らせているが、
そろそろ限界である。先ほどから食べようと目星をつけていた料理
を頼もうと顔を上げて店員を呼び止めようとする。すると少女に近
づく者がいた。

「ごめんな、なのはちゃん。色々立て込んでな」

なのはと呼ばれる少女の向かい側の席に腰をおろし、手で扇ぎ急い
で此処まで来たとアピールして来る。

「はやてちゃん、何の用かな？」

はやての態度にそろそろ苛々が頂点に達しそうなのは、手短に要件を問う。遅れて来た理由を聞くのさえ時間の無駄に感じている。

「いやあ、なのはちゃん最近どうや。ウチの方は色々充実してるで。部隊運営の仕方は新しく新鮮でなあ」

なのはの心中など露知らず、はやては長々と近況報告を始めた。

中身の無いコーヒークップを見つめてなのはは、はやての1人喋りをやり過ごす。よくもそんなに話すことがあると、なのはは思う。

「でな、なのはちゃん。今日呼んだんわ、なのはちゃんに頼みたいことがあるからなんや」

二時間も遅刻して、ちゃんとした謝罪もなく、聞きたくもない近況報告を聞かされてやっと…。

「何かな」

長々話すと怒りが爆発しそつだ。

「実はそろそろ自分の部隊を創設しようと思うんや。昔から部隊を

持たたいと願っていたんやけど、カリムやリンディさんが後ろ楯になつてくれるから、部隊を創設して、なのはちゃんには入ってくる新人の子達の教導官として来てほしいんや。今なのはちゃんがいる武装隊に比べると人数は減るんやけど、その分集中的に育てられるからなのはちゃんが望む強さに育てられるから悪くないはずや。フエイトちゃんは承諾してくれてあとはなのはちゃんだけや。どうやら、来てくれへんやろか？」

「詰まり部隊に来て欲しいと」

要らない言葉を取っ払って一番の要点だけを言う。

「お断りするよ」

考える素振りも見せず、メニューを眺めながら言う。はやての顔は1ミリも見えていない。

「何でや。昔協力してくれる言うたやん」

「それ時効だよ」

素っ気なく言い放つ。

「いやいや、まだ時効までは時間あるで」

冗談かな、と思いつつコミを入れるがなのは取り合わない。何時の間にかおかわりしたコーヒーに口をつけていた。

「はやてちゃん。昔言ったかも知れないけど、私は無限に広がる空が好きなんだ。鳥の様に大空を飛び回るのが私にとって生き甲斐だから、友達であつても私を地に落とそうとするなら、容赦はしないよ」

コーヒーカップを静かに置き、はやてを見る。

その瞳には明確な敵意が表れていた。

敵意の籠った瞳を直視してしまったはやては自らの身体が震えるのを自覚した。冷や汗が吹き出し、手のひらは汗ばんでいた。

自分の誘いを断った相手に隙を見せる訳にはいかない。はやては余裕の表情を顔に張り付け動じてないのを装う。

なのははやてを一瞥すると席を立ち、店から出ていった。

暫くの硬直の後にははやては背もたれに身体を預け、張り付けた表情を剥がす。一息つき、心を落ち着かせる。

「フェイトちゃんみたいに私の傀儡にはなってくれへんなあ、なのはちゃん」

先ほどまでの恐怖に怯えていた姿は何処へやら、店員に料理を注文する。

「なのはちゃん、覚悟しとき。墜落させてやるから」

ニヤニヤと笑みを浮かべ、注文が届くのを待つ。

ふと、向かい側に空のコーヒークップが置いてあるのを思い出す。

「ウチが払うんかコレ」

管理局地上本部内特殊戦闘技術強攻部隊仮眠室。

1人の少女がソファーに横になり、腕で顔を隠して寝ていた。呼吸する度に胸が上下し、スースーと寝息が静かな仮眠室に聴こえて来る。

暗く光の入らない部屋は少女の寝息以外の音はしなかった。

コンコンとドアを叩く音が静寂を破る。控えめにノックされた音だが、少女が起きるには十分な音量だった。

目を開けた少女はソファーから立ち上がり、ぐーっと伸びをして身体をほぐした。

肩口まで伸びる淡い桜色の髪が微かに揺れる。

少女『月島 桜』はドアを開けて、暗く閉ざされた部屋から抜け出した。

眼前に広がるのは大量のデスク。1つ1つに異なった物が置かれて、個性豊かな仕上がりとなっている。どのデスクにも共通して言える

ことは、大なり小なり報告書が乗っていることだろうか。それらの席には屈強に見える男性や気の強そうな女性が座って、必死に書類を処理していた。脳筋とまではいかないがこの隊に所属する者たちの半数以上が書類関係の仕事を苦手としている。居残りのメンバーがまだ残業している。私の存在に気づけない程に奮闘しているデスクの間を抜けてその部屋を後にする。出る途中に紙の束が雪崩の様に落ちる音と悲鳴が聞こえたが、自業自得だと思い歩くスピードを落とさずに出る。

部屋の外は廊下で等間隔に窓ガラスが張られていて、夕日が入り込んでくる。夕日が演出する廊下には長身の男が空いてる窓の縁に腰かけていた。大方減らない書類に嫌気がさしてサボっているのだろう。顔は疲れきって整った顔立ちが台無しになっている。心なしか目も虚ろで儂く笑っている。時折身体が揺れて危なっかしい。

「レイアーノ」

このまま放っておいたら危ないと感じて、声をかける。私の声を脳が理解したのかレイアーノはゆっくりと本当にゆっくりと首を此方に動かす。縁から降りて此方に近づいてくるが、何処と無くフラフラと危ない歩きを披露してくれる。

「部隊長が…呼んでる」

ボソボソと聞くのが困難な声で用件を言って来る。

仮眠室をノックしたのは彼らしい。

「分かりました。有り難うございます」

お礼を言うとレイアーノは微かに笑う。身体が傾き、廊下の壁にもたれる。

「壁がひんやりする」

彼の事は無視して戦技隊【特殊戦闘技術強攻部隊の略】のトップの元へと歩く。身だしなみが乱れない程度の速さで歩き、呼ばれた理解を考える。色々有りすぎてどれなのか判断がつかない。

部隊長室の前まで来ると軽く一息ついて気を引き締める。一步前に踏み込み、扉をノックする。コンコンと乾いた音が響く。

「月島 桜です」

名乗りをあげて一度間を開けて、扉を開く。

開けて最初目につくのは立派なデスク。その席にどっしりと腰をおろしているのは威厳に溢れた厳つい中年……ではなく、間違えてそこに座ってしまったのではないかと思えるほど威厳を感じることに出来ない男性で書類の一枚をうちの様に扇ぐ光景だった。

部屋内に2人の客人在るのに、まるで我が家にいるような振る舞

いを見せ続ける。

「おお、来たか。悪いね、疲れているのに。でもさあ、君に客人が来ていてね。書類を処理しているところ悪いんだけど、レシリエ君に呼びに行ってもらったよ。いやあ、優秀な部下だね…書類の処理が遅いけどね。でね、用件は彼女等が話してくれるから、そちらにきいてな」

話は終わったとデスクの上に身体をぐてーっと預ける。そのままの姿勢でコーヒーを口に運ぶ。

行儀が悪いと言いたいが抑え込み、訪ねてきた知り合い2人の方に身体を向ける。

金髪の少女『フェイト・ハラオウン』とピンクの髪で武人の様な雰囲気『シグナム』。フェイトは控えめに手を振り、シグナムは此方を一瞥するだけだ。

「久しぶりだね」

嬉しそうにフェイトが言ってくる。心からの言葉は裏に何か含んだ感じがなく、すっと耳に吸い込まれる。

「お久しぶりです。今日は何の御用件ですかフェイト、シグナム」

近況報告をしても良いが視界の隅に見える部隊長『ツヴァンツ・ツ

ヴォルフ』が2人を鬱陶しく見ているのを認識してすぐに用件が何かを求める。桜自身すぐに終わらせてまた仮眠を取りたいと思っている。

「えーっとね、はやてが新しい部隊を設立するんだ」

「それで」

「うん。それでね、人手が必要なんだ。陸と空の教導官が。はやてちゃんが桜に手伝ってほしいんだよって言うんだよ。はやてちゃんが忙しいから代わりにシグナムと私が来たんだ」

「それだけ？」

部隊長室に私の声がよく通る。たった一言だけだが、フェイトを驚かせるには十分過ぎた。

「それだけって…とても大事なことだよ」

私彼女等なりに重大な話を理解出来なかったと思い、フェイトは優しく注意してきた。

シグナムは少しムスツとした顔をしていて、腕を組んでいた。

「昔、主はやてが言っていたことを忘れたのか」

桜には彼女が何をそんなに不機嫌になるか分からなかった。確かに
はやては昔、部隊を設立するときには手伝って欲しいと言ってきたこ
とがあった。なのはとフェイト、それに私もその場に居たが答えに
関しては保留すると言葉にして伝えたはず。今更になってそんなく
だらない話を持ち出されても困る。私には戦技隊の隊長としての職
務があり、気にいつている部署です。草案しかない未だ架空の部隊
に昔の口約束で出向出来る訳がないし、する気もない。

その事を懇切丁寧言葉を選びながら伝える。最後に堂々と行きた
くないと言う。しがらみで行きたくても行けないと解釈されたらまた
面倒ですから。

桜の意思表示を聞いたフェイトには理解出来なかった。昔から日常
生活でも魔法関連でも色々手伝ってくれた桜が親友であるはやての
願いを無下に断るのが分からなかった。

桜はやれやれと備えられた来客用のテーブルを挟んで向かい合った
ふかふかした4つの椅子の1つに座った。

フェイトは椅子に座る桜に詰め寄り、理由を問いたです。何故行か
ないのか。まさか上からはやてを手伝うなと圧力がかけられている
のか。もしくは手の離せない重大な事件を担当しているのだろうか。
頭の中で様々な憶測が飛び交うが桜の発した言葉に思考が寸断され
る。

「はやては…私に汚れ作業をさせたいだけでしょ」

「違う!」

桜の言葉を聞いたシグナムは憤慨した。自分の主が批難されたのだ。

「違わないよ。戦技隊は犯罪者の集まりで悪名高い部隊だからね。被疑者の殺害は当たり前のようにやっているから。はやてだって知っている事。新設の部隊にそんな殺人集団の隊長を引き抜くメリットはそれしかありませんから」

桜の言う内容にシグナムは顔を怒りに染め、待機状態のデバイスを取りだそうとするが、フェイトが抑え込み止める。

「暴力で解決するのを八神はやては貴女に許可したのですか？だとしたらお帰りください」

桜の放つ言葉には有無を言わせない迫力があり、場の雰囲気侵食していく。

桜とシグナム、お互いが醸し出す雰囲気は180度違う。シグナムは怒気を放ち、今にも目の前にいる主はやてを愚弄する者を八つ裂きにしようだ。フェイトが抑え込まなければ、飛びかかっていただろう。

一方、桜の心はどこまでも冷静だった。飛びかかろうとするシグナムを見る目は呆れと悲しみに彩られていた。

一方的な険悪ムードを破ったのは、手のひらと手のひらを叩き合わせる乾いた音。ツヴォルフが2人：正確に言えばシグナムを止めるために鳴らした。苦笑いを浮かべて立ち上がる。シグナムとフェイト

トの前まで来ると、2人の肩に手を置く。

「客人、宣戦布告は外でやってほしいね。いやあ、やっぱり無しだ。桜君はウチのエースですからね。くだらないことで万一怪我なんてされたら困ります。ですので今すぐお帰りください」

2人の身体の向きをクルリと回し、外へと押していく。

「はやくに伝えなさい」

追い出される2人の背中に声をかける。

「大地は貴女が立っている場所なんて簡単に蹂躪すると」

一途な狂気（前書き）

短い…短い!?

一途な狂気

「ゼスト、今すぐ隊を率いて件の違法研究施設に向かってくれ」

「それはまだ先の話だっただろうレジアス。何故早める必要がある」

「言う必要はない。兎に角頼むぞ」

制止の声が響く中、1人の男が友に背を向けて歩く。

レジアス・ゲイズ。

管理局地上本部のトップに君臨する男でかつては陸に平和をもたらそうと真面目に奮闘していた。年々予算を減らされていく陸の待遇を改善しようと手を尽くしていたが、未だに改善の目処がたたないことに憤慨して今、ある計画を実行に移す。陸のストライカーであり親友と呼べるゼストを利用した計画を。

ミッドチルダの辺境な地に隠された違法研究施設。
今宵、この場に管理局のメスが入る。陸のストライカーが指揮する強力な部隊が。

「余計なことをしてくれる、レジアス・ゲイズは」

用途の分からない機械群が占拠する部屋で紫色の髪を揺らす男がクツクツと笑う。

男の眼前にはボロボロになったストライカーが拘束されていた。身体に至るところが焼け焦げ、嫌な臭いを発している。

ストライカーを含む侵入者は壊滅に追いやられた。違法研究施設に配備されているAMF【アンチ・マギリング・フィールド】発生装置を搭載したガジェット・ドローンと戦闘機人の手によって。

ジェイル・スカリエッティ。ゼストが捕まえようとした犯罪者。数々の非道な研究に手を染めた狂人。彼の名前を知る一部の管理局員はそう認識している。

ジェイルはゼストを見下ろし、狂気的笑みを浮かべる。彼の頭の中では侵入者は実験材料へと変換されている。

通信で戦闘機人を2人、自分の居る場所に来るよう言い、目の前のモルモットをどうしようと考え始める。

暫くの思考を経て、ロストロギア『レリック』を身体に埋め込むことに決めた。

ゼストの先が決まるとタイミングよく2人の戦闘機人が姿を見せた。

「よく来たね、トーレにクアットロ」

トーレとクアットロにゼストを運ぶ様に命じて、新しい研究施設に引越す準備を始める。

管理局地上のストライカー、ゼスト・グランガイツの殉職、及び部隊の壊滅。ミッドチルダに衝撃を与える。

親友のレジアス・ゲイズは彼の殉職を利用して、地上本部の予算拡大と人員の増加を訴え、受理させた。

レジアスにとってこれは予想した結果の1つでしかない。ゼストが研究施設を押さえれば戦闘機人を管理局の戦力に加える。失敗したらそれを理由に地上の重要性を認識させて、魔導師の増員と運営資金の予算を手にいれる。どちらに転んでも陸にはプラスになる。ゼスト隊1つで今回の結果が得られるならレジアスには後悔はない。親友の命を投資したことに。

「恐いですね。親友を言い様に利用するなんて」

レジアス・ゲイズの執務室で件の人物の前で青年『ハグルト・フリーリング』は自らの身体をヒシッと抱き締めてわざとらしく怯えた声を出す。

レジアスを挑発しているのだが、気にも止められない。反応しないレジアスに飽きたハグルトは下手くそな演技を止める。

「僕も利用され必要なくなったらポイ」

何かを掴まみ投げる動作をする。顔は笑っているが目は笑っていない。ただレジアスを凝視する。

「否定はしない」

レジアスにとっては目の前の人物も自分が正義を成すための道具ではない。逆らうなら排除するだけだ。制服の内ポケットに忍ばせている確かな重量感を意識する。

礼儀正しい青年を演じている狂人はレジアスの使える主力の1人だ。簡単に消せる程軽い存在ではない。

「キサマにはシュピーレン少将率いる『対強行独立航空隊』の隊長、高町なのはに復讐すると言う目的がある。俺もまたシュピーレン少将の主力である小娘が非常に邪魔だ。お互い目的が一致している間は消すことはしない」

「別に…高町なのはさえ落とせれば僕は構いませんよ、消されても高町なのはと言う名前を言葉にすると胸の内で理解できない何かどす黒いモノが暴れ回る。怒り、憎しみ、憎悪、様々な言葉で表せるこの感情、この思いが身体に張り巡らされた血管を流れる血のスピードを上げ、熱くする。」

しかし、憎いなんて言う陳腐な言葉で表しているのか、この感情を他の言葉で表せるモノなのか。あの白いバリアジャケットを赤く染め上げたい。あのムカつく顔を苦痛に歪めたい。あの綺麗な身体に穴を空けたい。死なない程度に殺したい。

ニヤニヤ笑いながら身体をクネクネさせる。

夜になり建物の光で明るい街並を40代後半の男が歩いていた。自宅に帰る人々の波に乗り、自分もまた自宅へと向かう。途中で人が溢れる大通りを外れ、人気のない小道を歩く。建物同士の間にある狭い道を進んで行く。自宅までの近道としていつも使う道。今日はいつもと違う光景が男の視界に映る。狭い道を塞ぐように立つ少女がいる。年の頃14、5のオレンジ色の髪をした少女で後ろで手を組んでいる。

「邪魔だ、退きなさい」

威圧的な声で少女に退くように言うが、少女は聞きいれない。

少女は組んでいた手を離して男に向かい上げる。右手に銃型のデバイスを握りしめ、構える。

いきなりの事態に男は持っていた鞆を落としてしまう。後退り、逃げようとするが足元に魔力弾が撃ち込まれ、尻餅をついてしまう。

「ま、ままま、待て。待ってく」

少女は男の命乞いに興味はなく、引き金を引く。パン、そんな音がすると男の眉間に風穴が空く。仰向けに倒れ、血が水道管を捻ったようにドクドクと流れていく。

少女は血を流すだけになった死体を一瞥して夜空を仰ぎ見る。

「ランスターの弾丸は外しはしない」

ポツリと呟く。涙が頬を伝って地面に落ちるのも気がつかないまま
夜空を眺め続ける。

鳥と犬（前書き）

狂犬にあらず。原作通りにもあらず。

鳥と犬

ミッドチルダには法と平和の番人達がいる。彼等は悪を裁く矛であり、人々を守る盾である。しかし、いかなるモノであれ、絶対的な白にはなりえない。また絶対的な黒にもなりえない。物事は全て白と黒が混ざりあつた灰色。見る人、考える人によつては白が強く出たり、黒が強く出る。

管理局も例外ではない。正義を語る組織でも、人の数だけ正義がある。人の数だけ悪がある。正義とは同時に悪となる。万人の正義などではなく、誰かが悪と批判する。ありきたりかも知れないが正義と正義はぶつかり合う。己が正義こそ心理である。

ミッドチルダには有名な人物達がいる。善し悪しに関係なく人々に思われている。彼等は誰よりも己が正義を信じて動く。されど自らの正義が万人に理解されることは望んでいない。ただ、自分にとつての確固たる信念であれば良い。

管理局『対強行独立航空隊』隊長『高町なのは』もその1人だ。高町なのはは地球出身の魔導師で元は普通の少女でしかなかった。魔法を知つた切っ掛けはPT事件。続けて闇の書事件に遭遇。どの事件も持ち前の魔力と次元航行船アースラのクルー、現地の囑託魔導師『月島 桜』と『鬼道 暁』。PT事件の容疑者『フェイト・テスタロツサ』と闇の書事件で闇の書の所有者『八神 はやて』と言つた仲間がいた。数年間の囑託魔導師を経てレルム・シュピールン少将が新設した対強行独立航空隊に隊長として引き抜かれた。圧倒的な魔力素質と空中戦の強さから『管理局の白い凶鳥』や『天の魔王』と呼ばれ、犯罪者に恐れられている。

「何でこんなについてない!？」

ミッドチルダの某所。全身を黒く染めた男が顔に恐怖を染めて走り続ける。汗が身体中から流れでる。脂汗で手からデバイスが滑り落ちそうになる。落としたら凶鳥から逃げる事が出来なくなる。

とある建物の影に身体を滑り込ませ、へなへなと力なく尻餅をつく。些細な出来心だ。魔が指しただけなんだ。確かに悪いことをしてきた。人を騙して金を奪ったり、薬の運び屋をしたり。オレ達の組織はそんな小者じみた活動をしていた。いつかはミッドチルダを激震させる組織になりたいとボスは子供見たいなことを夢に見ていた。オレは一生小者組織のままだと笑っていた。そんなオレ達に一生に一度、千載一遇のチャンスがやって来た。管理局に対してテロ活動を展開する武装組織がオレ達と共闘したいと連絡してきた。地味な活動しかしないオレ達にテロリストが何を求めているのかと最初は疑問に思ったが、すぐに疑問は解消した。ミッドチルダのある場所でロストロギアの裏取引をしてほしい。「ゾーン」と呼ばれる疑似太陽を生成する球状のロストロギアだ。少し手を加えれば人間を焼き殺す危険な物に昇格する。それを管理局の地上本部で発動させて管理局員を一網打尽にする計画。彼等テロリストが地上のエース『地の霸王』率いる戦技隊を引き付ける。その間にオレ達がゾンを使い地上本部を壊滅に追い込む。

計画を聞いたオレは今までの疑心がぶっ飛び、心臓がバクバクした。ボスが言っていたミッドチルダを激震させる事がオレ達の知名度を上げる。考えただけでにやついてしまう。

計画は途中まで順調だった。対強行独立航空隊が現れるまでは。白い髪に黒いバリアジャケットを来た綺麗な女性に率いられた部隊の前にオレの仲間は次々倒れ拘束されていた。ゾンを持ったボスも奮闘したが、訓練を受けた部隊には勝てなかった。

捕まることを恐れたオレは仲間を見捨てて逃げ出した。組織に愛着なんて無かった。ヤバくなったらすぐに行方を眩ませるつもりだった。今思うと馬鹿だった。大人しく捕まっていれば良かったと後悔する。上空で凶鳥が目を光らせていたなんて。気づいた時にオレは恐怖した。凶鳥に狙われた者は地面に墜落させられる。凶鳥に出会った時は空を汚してはならない。そんな噂を聞いたことがあったが、オレは捕まりたくない一心で空を飛んで逃げてしまった。

「逃げられる。大丈夫…逃げられる筈だ」

小声で自分に鼓舞する。こんな筈ではなかったと思いながら。歯をガチガチと鳴らす。どんなに心を落ち着かせようと努力しても、止まらない。

カッソ。

不意に聞こえた足音に心臓がはねあがる。

カッソ…カッソ。

徐々に近づいて来る足音に呼吸が荒くなっていく。

「あ、あ、アアア！！」

相手の不意をつこうとガバツと立ち上がり、デバイスを向ける。放たれる魔法。されど強固なシールドに全て防がれる。

「ヒイ!!」

駄目だ、やられる。

シールドでオレの魔法を防いだ白い魔導師が歩を止める。

「残念だけでもう終わりです。抵抗は止めてください」

突き付けられたデバイスにオレは震えて自分のデバイスを手放してしまう。急いで拾おうと手を伸ばすが、杖型デバイスに弾き飛ばされ手の届かない場所に行ってしまう。

「頼む!!見逃してくれ!!」

情けないと思われても良い。捕まることに比べたらまだ我慢が出来る。

「いいよ」

は!?

何て言ったんだ。…いいよ?助かった…助かった!!

相手に背を向けて走りだす。走り方はぐちゃぐちゃしていて見られるものではないが構わない。もう少して建物の影から出れる。管理局の手から逃れられる。

黒い影がオレの前に出現したことを最後にオレの意識は消えていった。

ザシユ…文字にすればこんな感じだろう。

崩れ逝く犯人の男を見ながら高町なのははため息をつく。あまりに情けない犯人の行動について。プライドを捨てて命乞いをする男を逮捕するのが何故か嫌になり逃がしてしまう。

逃がしたところで彼が助からないことは確定していた。今なのはが
いる地区一帯は戦技隊の管轄する場所だ。そして男を切り裂いた影
は戦技隊長の月島 桜である。

戦技隊において被疑者死亡はよくある。元犯罪者や局内の鼻摘み者
達の寄せ集め部隊で我が強く倫理観の欠けた者達で溢れている。こ
れを統率するのが月島 桜。『管理局の黒い凶犬』『地の霸王』な
どと言う二つ名を持つ。

「良い夜ね、なのは」

今しがた切り捨てた死体を気にもせず
に挨拶してくる。死体から流
れる血がなのはの方へと広がっていく。

「相変わらず容赦がありませんね、桜先輩」

暗い影に浮かぶ白い凶鳥は明らかに作った笑みをする。
街灯の明かりに照らされた黒い凶犬は清々しい自然の微笑みを浮か
べる。

「何度も罪を犯している人に容赦なんていります?」

「いらないね」

お互いの瞳に映るのは自分と正反対の色。白と青、黒と赤。何処ま
でも高く深い青空を飛び回る凶鳥と何時までも続く歪な大地を独走
する凶犬。

なのはが飛び上がり、桜が腰を低くする。

「空から引きずり降ろして羽を引き裂いてあげます」

「二度と走り回れないように足と大地に穴を開けてあげるよ」

白い凶鳥が風を切り、黒い凶犬が地を蹴る。

ミス・レオ（前書き）

意味が分からなくてすみません

ミス・レオ

ミッドチルダには時空管理局と言う盾が存在する。強大な力で次元世界を管理して秩序を守る人々の盾。起こりうる人災、自然災害に対抗するために力ある魔導師を見いだし、育成する。ミッドチルダで法を破る愚かな犯罪者達は彼等の手によって逮捕、更正する。例外は戦技隊で被疑者死亡に導いている。ミッドチルダの平和は彼等時空管理局によって守られている。しかし、管理局だけではこの平和は有り得ない。ミッドチルダの人々にはそう言う声をあげる者がいるのである。ターク家と言われる者達。6人家族に執事が1人でマフィア、ヤクザ、ファミリーと呼ぶことが出来る。ミッドチルダ第三危険区域と指定された犯罪者や荒くれ者が集まる場所に居城を構える支配者達。裏事業に関わる者は彼等の援助の下で取引や犯罪を犯す。されどターク家の利益にならない者、不利益に繋がる者はお抱えの始末屋に消されてしまう。その恐怖による支配が犯罪者の行動を抑制している。人々にとってはターク家が犯罪を減らしているようなものである。

管理局からしてみれば質の悪い犯罪組織でしかない。今すぐに壊滅に追い込んでやりたい。しかし手をだすことができない。人々からの支持と尻尾を掴ませない狡猾さが逮捕を許さない。理由なく手をだせば管理局の名声に傷がつく。信用を失ってしまう。

八神 はやてにとってフェイトは友達だ。間違いないと彼女は言うだろう。

八神 はやては家族を事故で亡くした。1人きりの生活を強いられていた。闇の書の所有者であったが故に。しかし、そのおかげで新

たな家族を手にする事が出来た。だが、最後に出来た家族を失ってしまった。仕方ないと口では言うが心の中では管理局を批難した。何か方法があつたはずだと。自分なら上手くやれた。子供の言うことだが、何時しかはやては自分なら上手くやれると思ひ込むようになった。事実上手くいっていた。友人達の中で一番の出世頭となった。その事が『自分なら上手くやれる』と言うことに拍車をかけることになった。出世して管理局を内側から変えろと。そのために親友を使うことにした。なのは、フェイト、桜の3人を自分の駒にしようとした。しかし、なのはと桜は本能的にはやてを拒絶した。はやてはなのはの名声を使い、手駒を増やそうとした。桜には自分の出世を阻害する輩の始末をさせようとした。『管理局を改善したい』と言えば2人共協力してくれると思っていたのだ。だが、失敗した。仕方ないと切り捨て多少不安が有るが自分の家族とフェイトだけで上手くやれる。しかし、レジアス・ゲイズ率いる地上部隊の戦力が増大。フェイトから聞かせられた次元犯罪者の影。はやてを苛立たせる事態が次から次へと発生する。先日も犯罪者による地上部隊襲撃があつたが、凶犬と凶鳥に阻止された。成功してレジアス派が消滅してくれば良いのと思つたが。大丈夫、自分なら上手くやれる。

ある街の裏路地で殺人事件が起きた。黒いスーツを着た男性が斬殺されているのが発見された。

現場には高町なのは率いる対強行独立航空隊通称『強空隊』が現場に駆けつけて、暗い夜の中で明かりをつけて現場検証を行っていた。黒く固まつた血溜まりを見ながらなのはは先日の戦いを思ひだしていた。すでに何度もぶつかりあつてきた桜との戦いは今回も決着がつかなかった。ヒートアップした戦いに水をさしたのは互いの副隊長からもたらされた念話だった。

先行していた鑑識部隊の調査報告を聞いている白髪の副隊長になのははもう少し空気を読んでほしいと思った。

現場を荒らさない様に見渡す。

壁に3つの爪跡。裂けた肉片。麻薬の詰まったアタッシュケース。

…猛獣かな？

1人首を傾げるなのは。可愛らしい外見と仕草があっではいるが、場所が悪い。

すると、暫く鑑識の説明を受けていた副隊長が戻ってくる。

「なのは、見て分かるかもしれないけど、物取りではないみたいで
す」

「そっか。じゃあ何だろう？」

副隊長『リーンフォース・ドライ』と並んで歩く。

「怨恨によるものでしょうか？」

「分からないよ。だけど同業者同士の争いは薄いと思う」

「確かに、同業者同士なら麻薬を持ち去りますね。現場にデバイスも有りましたが損傷が激しくて、映像があるかどうかも分かりません」

手がかりが少なく2人して頭を抱える。

突如として、リーンフォース・ドライが立ち止まる。いきなり止まったことなのは不思議に思う。ドライの顔が何か妙案が浮かんだのを知らしている。

「この場所は桜の行き付けのバーが近くにありますが。行って何か助言してもらいましょう」

良い笑顔をしていた。なのはは桜に頼るのは気が引けたが、何かしら欲しいのでドライの提案に乗ることにした。

「分かりませんよ、それだけじゃ」

落ち着いた雰囲気の仕事疲れを労ってくれる小さなバー。そのカウ

ンター席で犬と鳥が隣同士で座っていた。淡い桜色の髪をした少女月島 桜が苦笑を浮かべながら答えた。彼女の目の前には澄んだ赤色のカクテルが置かれていた。対するなのは烏龍茶だ。

「桜先輩、私もお酒が飲みたいです」

ムスツとした顔で隣の人物を睨みつけるが、桜はなのはを一瞥すると、店の壁にある貼り紙を指差す。

『飲酒は18才から』

日本の法律より低い16なのはには許されない。自分より2つ上の桜が羨ましいと、口元にグラスを運ぶ桜の仕草を眺めていた。その事に気づいた桜は困ったように笑う。

一般的に高町なのはと月島桜は犬猿の仲だと思われているが間違っている。確かに戦技隊と強空隊の隊長同士としては争い合うが互いに隊長と言っくくりを無くせば、とても仲が良い。理由は互いの部隊にある。一言で言えば仲が悪いのである。互いに出し抜こうと桜となのはを振り回して戦わせ合う迷惑な人だ。うんざりしてしまうが桜もなのはも自らの考えを実現することが許されるのを知っているから従っている。

「とりあえず、私の方でも何か調べてみますよ。ユーノに協力してもらおうのはどうですか」

グラスを揺らし、ただ微笑む。

相変わらず優しい。

なのはの頭の中には小学校時代の桜が映った。

無限書庫。あらゆる次元世界の情報が書物として保管されている場所。保管と言ってもただそこから本が散らばっているだけでしかなかった。時間が経つにつれ増加していく本と言う情報媒体に誰もか諦めていったのである。だが、ある1人の少年がその停滞に終止符を打った。『ユーノ・スクライア』と呼ばれる少年が闇の書事件の解決に無限書庫で適切な情報を得たことに由来する。彼の手腕は無限書庫を機能させるに至った。

「ユーノ君」

知っている声が聴こえてくる。

大量の本を中空に展開して読んでいるユーノ・スクライアは本から目をそらす。声の方向に目を向けるとなのはが此方に向かい手を振っていた。ユーノは他の司書達を避けながらなのはの元へと向かう。

「やあ、なのは。どうしたのこんな所に来て」

ユーノはなのはが本をあまり読まない人種だと知っている。本を読む暇があるなら飛んでいるとよく豪語しているのを聞く。別に読書を強要した訳ではないのに。そんななのはが無限書庫に来るのは珍しい。ユーノは誰かに言われて来たのだと推測出来た。

「実は、最近起こった事件のことについてなんだけど」

事件の内容を話してくれる。しかし情報が少なすぎてどうすればいいのか分からない。帰っていくのはを見つめながらどうすればいいのかと悩むしかなかった。

ミス・レオ 続(前書き)

喉が……痛い。

ミス・レオ 続

リーンフォース・ドライはリーンフォース・アインスの生まれ変わりである。

闇の書事件が解決した後、リーンフォース・アインスの先には消滅しかなかった。

最後に良き主に出会えたことが嬉しかった。

八神はやてにそう言ったが消えるのが怖かった。

生きることを許された4人のヴォルケンリッターが羨ましく思った。

刻一刻と迫る死に身体が震える。

アインスはある夜、走り出した。ただ自分の内に秘めた思いを話せる者達の場所へ。

念話で話し合流を求める。

外灯が仄かに照らす公園でブランコに腰を掛けたアインスは夜空を見上げながら人を待つ。

程無くして2つの小さな影が見える。少しずつ大きくなり、終には知り合いの少女達に変わった。

高町なのはと月島 桜。

アインスが主はやて以上に何かを話せる相手。はやてとフェイトは感情的過ぎて話を聞いてもらえそうにない。同情してほしい訳では

ない。桜なら黙って聞いてくれる。なのはは自分を助けてくれた。もしかしたらまた助けてくれるかも知れない。あり得ない淡い期待をしてしまう。

2人を前にして溜め込んだ思いが爆発する。

死にたくない。

もっと人生を謳歌したい。

美味しい物を食べたい。

何かしてみたい。

皆と遊びたい。

駄々を捏ねる幼子のように喚き散らす。

アインスが全てを吐き出した後、なのはは泣きそうな顔をしていた。そんななのはの頭を撫でる桜は困ったように笑っていた。

するとおもむろに口を開いた。

「助けてあげましょうか？」

アインスは目を見開く。

彼女は何を言った？

彼女はズボンのポケットから願いを叶える魔法の道具を取り出す。

数年後、リーンフォース・ドライは高町なのはの相棒となる。

高町なのはは第三危険区域の見回りをしていた。感覚を研ぎ澄ませ、辺りを注意深く見渡す。

先日起こった麻薬の売人が殺害された事件にほんの少しだけ進展があった。

殺された売人と先日逮捕されたテロリストの間でロストロギア『ゾンネ』の裏取引が行われていたこと、売人が殺される前後の時間帯に犯行現場に向かう女性を見た人物がいたことだ。情報提供の後に目撃者は事故死したが。

目撃者の証言によると、金髪で茶色のダッフルコートにミニスカート、黒いタイツの女性だったらしい。

そんな情報を頼りに、なのはは歩いて条件に該当する女性を探し続ける。少し離れた所にはリーンフォース・ドライが控えている。

所々の建物が荒れ果ててはいたが、奥に進むにつれて、瓦礫などが少なくなっていた。

なのはとドライは互いに一定の距離を空けて探索を続ける。

2人共時折、背後から敵意のない不思議な視線を感じているが、害意がないと分かると頭の片隅に留めるだけにしておいた。壊れた街灯は真っ黒なカラスが陣取り、場違いな異邦人を見つめている。

通りを歩きながら左右の道も確認していく。朝からそんなことを四時間続けたので、なのはは後ろのドライに念話で今日は切り上げることを伝え、引き返す。

あと少しで危険区域から抜けられるという時に、後ろからあからさまな敵意が背中に突き刺さる。

なのはが瞬時にレイジングハートを展開して身体ごと振り向く。ドライはなのはの後ろに撤退する。

後ろを向いた彼女達が見たのは、目撃証言と同じ女性。金髪にダッフルコートとミニスカート、タイトの女性だ。瞳は真っ赤でニヤニヤと口の形を歪めている。

「アンタ等さあ」

女性にしては少し低い声が響いてくる。

「邪魔なんだよお。お姉様方が鬱陶しく感じてるからさあ」

ダッフルコートのポケットから菱形の黄色い宝石を人差し指と中指で挟みながら取り出す。

「スラツシュ・レオ…セットアップ」

肘まで覆う機械仕掛けの獣の強靱な爪が姿を見せる。バリアジャケツトは着ていた物そのまま。金髪と爪が百獣の王を連想させる。

「お姉様方と言いましたか？もしかしてゾン・タークとモーン・タークのことですか？」

ドライが安全圏から質問するが相手は無言を貫く。

「残念ですが貴女には麻薬の売人を殺害した容疑がかかっています。抵抗しないで武装解除しなさい」

レイジングハートの切っ先を敵に向けながら事務的に淡々となのが言う。

獅子は腕を軽く広げ、腰を落とす。

言葉を介さず意思表示をする。合わせるようになのはも構える。

動き出したのは獅子を模した女性。地を蹴り走りだす。距離は30メートルあるがまさに獅子の様に獲物との距離を瞬間的に縮める。なのはがプロテクションを展開する前に女性は強靱な右の爪をなのはの右腕に突き立てる。

ザー！と言う音と共に右の肉を引き裂く。バリアジャケットなど有って無い様な物だ。

「ク！？」

痛みを堪え、シューターを何発も放つが、女性は軽いフットワークで全てを避けていく。

なのはは瞬時に距離をとる。止めどなく流れる鮮血が右腕を赤く染め上げる。左手で傷口を押さえるが血は止まることを知らない。

獅子が二度目の狩りを始めようとした時、なのはと獅子の間に黒い凶犬が着地する。

「下がりなさい、なのは」

静かにしかし力強く月島 桜はなのはに言う。

暫く、桜を睨んでいたなのはは諦めた様にドライに支えられながら戦場を離れていく。

2人の姿が見えなくなると、桜は槍型デバイス『ラピエサージュ』を構える。

「お待たせしました」

顔に笑顔は無い。

獅子も爪を構える。

「殺しはしない。お姉様方は貴女の生け捕りを望んでいるのでえ」

同時に走り出し、互いにデバイスを打ち合う。

ミス・レオ 終

獅子と犬が戦うのを振り返らずになのはとドライは地上本部に撤退していく。

なのはの辞書には『撤退』の二文字が存在するので堂々と戦いに背を向けることが出来る。

管理局内で負傷した腕を治療した。肉を削がれて痛々しくなっていた腕は今や振り回して何処かにぶつけてもたぶん大丈夫だろう。目の前にいるはやてを見ながらなのはは思った。

けして腕をはやての顔面に思い切り叩きつけたいては思っではないない。あの日遅刻してふざけたことをぬかしたはやてちゃんが何の用かな？と少し首を傾げる。

何時ものニヤニヤとした笑顔もなく『真剣』と言う漢字を当てはめた顔をしている。そんなはやての様子にただならぬモノを感じ取り、なのはも真剣な顔つきになる。

「何か用かな、はやてちゃん」

最初に口を開いたのはなのは。静かで力強い声で決別した友達の用件を聞く。

はやては暫く黙り込んでいたが、意を決した様に口を開く。

「桜ちゃんにスパイ容疑がかかっているんや」

月島 桜が解決するテロ騒動には死亡者が出てくる。大抵の場合、リーダー格を残してあとの者を始末する。そのリーダー格においては情報を聞き出した後に然るべき刑を受けてもらう。レジアス中將はその非道な行いに目を付けた。

月島 桜はターク家と繋がっているのではないのかと。ターク家が支援しているテロリストが失敗した場合に管理局に情報を渡さない様に始末しているのではないかと。疑惑の真偽などレジアスには関係ない。地上の平和を乱すターク家を潰す口実さえ有れば。今や囚われの身となった桜をダシに地上本部はレジアスの指揮の下に戦いの準備を進める。

「レジアスはこの機会に桜ちゃんを消す気や。レジアスの思惑に振り回されるのは我慢できへん。ウチは桜ちゃんを救出して、計画を潰してやりたいんや。なのはちゃんに協力してもらいたいんや」

はやてがゆっくりと右手を差し出す。

その手にははやての思惑が表れていた。なのはと桜に恩を売ることと、まだ桜には利用価値があること。

「はやてちゃんは腹黒いな」

清々しい笑顔でなのはは言い放つ。

2日後、危険区域の奥に建てられた巨大な屋敷。その屋敷前に大量の管理局の陸士が集結していた。地上本部にいる局員のほぼ全てがレジアス中将の号令に集まり、デバイスを展開して、待機している。その中にはやてとはやてに従うヴォルケンリッターも混ざっていた。しかし、この場に白い凶鳥の姿はない。彼女は此処から少し離れた人気のない場所にいた。∴別にはぐれたわけじゃない。

1人別ルートから気づかれず屋敷に侵入して桜を助ける作戦だ。だが、この作戦は実現不可能だ。∴侵入する前にすでに見つかっているから。金髪でダツフルコートにミニスカート、タイトの女に。

「こんな所で何をしてるんですかあ、有名人の高町なのはさん」

肘まである手甲に鋭く強靱な爪のデバイスを展開した腕をぶんぶんと振り回しながら、話しかけてくる。

「別に何でもないよ」

「何でもないなら帰るが良いぜえ」

両の爪を擦り合わせて不快な音を鳴らす。

なのはには帰さないと言ってる様に聞こえる。

「とりあえず、貴女は逮捕」

レイジングハートを構え、シューターを放つ。

それが戦いの合図となる。

擬人の獅子は中腰になると、両腕をダラリと力を抜き、走り出す。

ピンク色のシューターを掻い潜り、なのはへと爪を突き出す。

瞬時に空に舞い上がるのはに対して突き出した爪は虚しく空を切るだけに終わる。

空へと翼を広げたなのはは地上の獅子にシューターを次々撃ち込む。放たれたシューターは獅子の身体に突き刺さり、ダメージを与えていく。

負けじと獅子も爪を振るう。黄土色の魔力刃が飛び出し、回転しながらなのはの翼を切り裂こうと迫り来る。

なのははプロテクションを前面に展開して防ぐ。

獅子は身体全体で回転して魔力刃を連射する。さながらコマの様に回転しながら移動する。

「ぐるぐるぐる〜と回りますう」

回転回転回転。常人には耐えられない程の回転速度と移動スピードであっても獅子の女にとっては暢気に喋れる余裕がある。

回転しながら地を蹴り、跳び上がる。

シューターを蹴散らしてなのはに接触する。

なのはは防御する暇もなく、獅子の爪を左肩に受ける。

獅子を上、なのはを下にした状態で地上へと落ちていく。

「止めえー!!」

落下しながら爪を振り上げる。

状況を打開すべく、なのははレイジングハートの先端を獅子の腹に突き刺す。

「ディバインバスター!!」

零距离でピンク色の魔砲が炸裂する。敵を空へ空へと押し上げていく。反動でなのはは地面へと叩きつけられる。背中に強烈な衝撃が走り、痛みが顔が歪む。

痛いでは済まないレベルの感覚を我慢して立ち上がると、丁度空から獅子が降ってきた。

「華麗なるううつつ着地をみ」

傷ついた獅子は運悪く近くのゴミの山に突っ込んでしまう。暫く動かなかつたがこの悲しい状況を打開出来ないと知ると、諦めて出てきた。

獅子が中腰になり爪を構えると先程の悲しい雰囲気は嘘のように、場の雰囲気が変わった。

なのはもレイジングハートを構え直して、敵の出方を待つ。

2人が睨み合い何秒：もしくは何分経ったのか。互いの周りには闘気が見えない刃の渦と成り、2人だけの舞台を演出する。今か今かと2人が踊り出すのを待つ雰囲気は無粋な観客がぶち壊す。

カー、カー。

なのはの研ぎ澄まされた感覚が音を頼りに無粋な輩の位置を特定する。

急いで音源の方へ振り向くと一羽の黒い鳥が此方を見つめていた。

カー、カー。

鳴き声をあげるとその無粋な輩は飛び立った。

なのははため息をついて振り返ると獅子の女が全速力で逃げる背中を見た。

「戻ってきて卑怯だよ!!!」

自分しか居ないこの場所でなのはの声は虚しく響いた。

それから二時間程してリーンフォース・ドライからターク家崩壊の報告が来た。

崩壊の根源（前書き）

長いだけのグダグダストーリーをどうぞ。

崩壊の根源

円卓に座る者達がいる。6人の男女が各々の指定された席に腰をおろして、出された紅茶に舌鼓を打つ。

彼らの座る円卓の少し離れた所に1人の男が佇んでいる。

彼等はミッドチルダに居城を構える大小様々なマフィアの中で管理局にとって厄介極まりない組織と認識されている。まっとうな人間なら足を踏み入れる事のない危険区域の全てを管理下に置く巨大な組織。『ターク』と名乗る兄弟によって組織される犯罪者集団。

「管理局が我々に戦争を仕掛けるようだ」

嘆かわしいと額に手をやる長身の男『ゾン・ターク』のくだらない1人芝居に『ディーンズ・ターク』は目を反らしてゾンに気付かれないように溜め息をつく。

彼女は灰色の髪を腰まで伸ばし、鋭い目は何処までも黒い。青いローブと黒いスーツを着こんでいる。

ディーンズはふと、向かいに座る人物に目を向ける。ローブの色が赤い事以外に自分とは何も変わらない女性が同じようにゾンから目を反らし、つまらなそうにしている。

双子の妹『モーン・ターク』は私と目が合うとアイコンタクトしてくる。

つまらない。

我慢してほしい。私も嫌なんだから。

そんなやり取りをモーンとしていると周りの話が進んでいることに気がついた。

円卓の中央に映像が浮かびあがっていた。

暗い小さな部屋の中で1人の少女が両手を天井から伸びる鎖で吊るされ拘束されている。その少女は傷だらけで身体が力無く頭がガツクリと下を向き表情が見えない。唯一分かるのは肩口まで伸ばされた淡い桜色の髪だ。

「地上の主力である月島 桜は我々の前に破れた。管理局を潰すチャンスが巡ってきた」

ゾンは立ち上がり、円卓の外周を周り始めた。

「奴等はこれを好機と攻め込んで来るだろう。今まで格下のテロリスト共を使っていたが、今こそ全戦力をもってして管理局を消し去る」

ゾンの決意表明に周りの者達の反応は様々だ。

ディーンズとモーンの子は我関せずと言った感じだ。

小太りの男『フライ・ターク』はゾンに賛成なのか、首を上下に振っている。

ひよろりと痩せた男『ドンナス・ターク』は拳動が怪しく、ソワソワしている。

他のメンバーはゾンに賛成のようだ。

会議が終わり、モーンと一緒に自室に戻ろうとしていると、ドンナアスが此方に駆けってくる。かなり距離が離れていたのだろう。ドンナアスは息切れを起こしていた。暫く、ドンナアスが呼吸を整えて話せる様になるまで2人で待つ。

「デインズ、モーン、此处では話せないことなんだが、少し彼処で話せないか？」

ようやく話せる様になったドンナアスは近くにある部屋を指差して確認をとってくる。それに2人で了承して空き部屋に入る。

ドンナアスは部屋に身体を滑り込ませ、外を伺うとソロリとドアを閉めた。

余程重大な話なのか、ドンナアスは部屋を物色する。盗聴の類いが無いと分かると目に見えてホツとした。

「それで…話とは？」

そろそろ話し掛けても問題ないと思い、話す様に促す。

「さっきの会議でゾンが管理局と殺り合うなんて言ってただろう」

「そうね」

相変わらず臆病な男だと思いながら肯定する。

「私はそれが無謀だと言いたい。蛮勇だ、身の程を知らなすぎる。ザムスもフライも馬鹿みたいにゾンに従う。アイツ等、本当に勝てるなんて思っているのか」

「無理でしょうね」

ターク家の中で一番現実的な考えが出来るドンナアスの言う事に私達姉妹も賛成する。

「デインス、モーン。君達は私と同じ思いのはずだ。負ける戦いを態々するなんて馬鹿のする事だと。だから私は管理局に投降しようと思う」

私はドンナアスの言い様に心の中で笑った。隣に立つモーンも同じ様に笑っていることだろう。私達が思った通り、臆病風に吹かれた。

「危険よ」

「分かっている。だけど死ぬよりマシだ」

「投降しようとしても管理局に殺されるだけ。私達ターク家の人間を生かすメリットがないから」

出てきた所を撃たれる。タークは今、犯罪者の象徴みたいなモノだから、管理局にとって生かすことはデメリットしかない。

「じゃあ…どうすれば良い!?!」

絶望的な表情のドンナアスに私は1つの救いを投げる。

「月島 桜を連れて行きなさい。重要人物を助けた相手に手を出すほど管理局は落ちぶれてはいないでしょう」

私の言葉を聞くとみるみる顔色が良くなっていくドンナアスを見ると単純だと思う。

私達に礼を言う嬉々とした表情で部屋を出ていく。

ドンナアスの足音が聞こえなくなると私とモーンは顔を見合わせてクスクスと笑いだした。

ターク家と管理局の戦争が始まった。互いに持てる戦力を投入した総力戦。

そんな中、ドンナアス・タークは屋敷内を歩いていた。ある人物がいる場所へと。前線で戦える程の技量も力もない彼が屋敷に居ることを不審に思う者はいない。しかし、彼自身臆病なので誰かに会う度に心臓が早鐘を打つ。

漸く目的の部屋に着くとドアの前で深呼吸をする。気持ちを落ち着けて強固に閉じられたドアを開けて、中に入る。

光の弱い照明が照らす部屋は薄暗く不気味な雰囲気醸し出す。部屋の中央には両手を鎖で吊り上げられた淡い桜色の少女が力無く存在する。意識が無いのか、ドンナアスの足音がしても反応しない。ドンナアスはそんな少女の近くへ行き、鎖を外していく。ギチギチと絞められた鎖を外すのに時間が掛かった。鎖が全て外れると桜はその場に崩れ落ちる。

「おい！！起きろ！！」

桜を起こし肩を揺らす。桜は目覚める気配がしない。まさか死んでいるのでは？と焦ったが微かに胸が上下しているのを見て安心する。服のポケットに入れておいた桜のデバイス『ラピエサージュ』を取り出し、桜の着ている管理局の制服のポケットに無造作に突っ込む。ドンナアスは桜の身体をどうやって運ぼうかと散々悩み、結局はおんぶする事に決めた。

細い体つきだがやはり男性なので軽々とは行かないが桜を持ち上げる。首に腕を掛けてバランスをとらせる。

部屋の出口に向かい歩を進めると背中が身動きするのを感じた。首に回されている腕がピクリと動いた。

瞬間、物凄い速さで首を絞めてくる。

「あ…かは…！」

苦しい、息が…出来ない!?

首に回された細い腕を外そうとドンナアスは桜の腕を掴み、力を入
れるが外れない。

意識が……。

管理局との戦争。

ターク家は各地に散らばっていた部下を危険区域に集結させた。デ
バイスや質量兵器を持ち出し、各自に武装する。

管理局とタークの戦いはターク家が有利に進めていた。普段踏み入
れない場所での戦いは土地勘の無い管理局に不利である。また局員
達はレジアス中将の命令により、非殺傷設定を解除している。自ら
が放った攻撃で血飛沫をあげながら倒れる相手に管理局員の中で恐
怖する者が出始めた。

非殺傷設定のせいで殺すことの意識が薄れた局員は精神に負担が掛
かり、正常な判断が出来ない。ターク家の部隊が放つ質量兵器に無
謀に突っ込み、死んでいく。

ターク家の執事『ミットヴォツホ』は管理局の練度の低さに呆れていた。

遠目に見える管理局員の中には嘔吐している者がいる。

ミットヴォツホは手に持つスナイパーライフルでその局員の頭を撃ち抜く。撃たれた局員の周りにいた者達は悲鳴をあげる。

彼等の流れ作業の様に頭を撃ち抜いていく。

暫く、後方から局員を狙撃していると、前線で膨大な魔力が弾けるのを目撃した。

黄金に輝く砲撃が部下達を撃ち抜いていく。後方の狙撃部隊にも届き、被害をもたらした。

「何があつた!？」

スナイパーライフルを投げ捨て、前線へと向かう。双剣型デバイスを展開し、前線で戦う者達に合流する。

先程の砲撃で敗色の濃かった管理局員達は持ち直し、攻め始めた。

ミットヴォツホは迫り来る局員を片っ端から切り裂いていく。

次々に局員を切り捨てていると、雷撃が部下達に襲い掛かるのを見た。

薙刀型デバイスを振り回す長身の男『レイアーノ・レクリエ』が放つ雷撃が部下達を焼いていく。

別の場所では杭打ち機型デバイスで敵を貫いていく男『ハグルト・フリーユリング』がいた。

クソ!!! エース共を投入してきたか。

焦りを覚えたミットヴォツホは手近にいるレイアーノに飛び掛かる。勢いよく双剣を振り下ろすが薙刀に防がれた。

「死んで頂く」

双剣を縦横無尽に振り回してレイアーノを殺そうとする。

「オマエが死ね!!」

茶髪をオールバックにした頭を傾け、レイアーノは迫る刃を避ける。お返しとばかりに薙刀を横薙ぎに振るう。

互いの武器が打ち合ったり、空振りしたりする。

何度目かの衝突。ミットヴォツホとレイアーノは力を持ってして相手を潰そうとお互いに前進する。

長い間、均衡を保った力比べは黄金の魔力によって終止符を打たれた。

ミットヴォツホとレイアーノの2人を撃ち抜こうとした砲撃はバツクステップすることで回避する。

砲撃の方向を向くと、銀髪で赤い目をした漫画か何かから出てきたような美形が立っていた。手には身の丈程の巨大な剣を持っていて、軽々と振り回しながらミットヴォツホに駆けていく。途中、立ち塞がるターク家の部下を切り裂いていく。血に彩られた大地を踏みしめて、ミットヴォツホに大剣を振り上げ、勢いよく振り下ろす。

ミットヴォツホは双剣を交差させて大剣を受けるが一撃でデバイス

が破壊される。

「弱いぜ」

大剣を右のシヨルダーアーマーに乗せて美形の男『鬼道 暁』がミットヴォツホを指差す。

「大人気無いな管理局。管理局最強まで持ち出すか」

予備の双剣型デバイスを取り出し、構える。

ミットヴォツホと暁の睨み合い。仕掛けるタイミングを、自らが出せる最高の一撃を放つタイミングを待つ。数秒が何分にも何時間にも感じられる。

ミットヴォツホは不意に今まで聞こえていた頭を撃ち抜く音がしなくなつたことに気づいた。

後方の部隊はどうした？何故奴等を撃たない。

ミットヴォツホは焦る。ターク家の中で一番の実力を持つミットヴォツホであつてもハグルト・フリーリング、レイアーノ・レクリエ、鬼道 暁のエース級3人を相手にするには限界がある。

どう切り抜けるか考えを巡らせていると、後ろから足音が聞こえてくる。ミットヴォツホの直後ろに来ると何か固い物を後頭部に押し当ててくる。

「零距离でスナイパーライフルを撃つと頭ってどうなるんですか？」

女の声が聞こえてくる。

後頭部に当てられているのはスナイパーライフルの銃口だと分かる。

「管理局が質量兵器を使っているのか！！」

「別に構いません。戦技隊にそんな決まり事は有りませんから」

前方は薙刀、杭打ち機、大剣。後方にはスナイパーライフル。ミットヴォツホには逃れる術は無く、迫り来る彼の死を一羽の鳥がジッと見ているだけだった。

ターク家の屋敷、円卓のある部屋に3人の男女が居た。自分の指定席に座るゾン・ターク。その後ろで銃を片手に構えるディーンズ・ターク。前にはディーンズと同じ顔つきをした双子の妹モーニング・ターク。

「冗談はよせ」

子供の悪戯を相手にしているような口調でゾンは席から立ち上がる。
うとする。

バァン！！

乾いた破裂音が響き渡り、ゾンの足下に弾丸が撃ち込まれる。

「そちらこそ、冗談は止めてください。銃を持つ相手に冗談なんて
言うのは」

「!?!」

言葉のような呼吸音のような判断の難しい音を出すゾンの額から汗が流
れ出す。

「何が目的だディーンズ、モーン。」

「簡単。貴方を殺すだけ」

円卓を挟んで向かい側に立つモーン。黒い瞳は狂気に渦巻いている
様に見える。

「今私を殺したら、管理局に負けるぞ」

「構いませんよ。ターク家が滅んでも。私達の目的ですから」

「何!？」

「全てが自分のモノだと勘違いして、指示を飛ばしているのは見ていて愉快でした。ドンナアスが管理局と情報の裏取引をしている事も知らず、完璧な作戦を考えてましたね。全部失敗で。周りが見えないいわね」

ゾンは怒りに身を震わせるがディーンズは気にも止めず、話し続ける。

「貴方が管理局に戦争を仕掛けると宣言した後、すぐに私達に助けを求めてきたわ。管理局に寝返る方法をね。だからあの凶犬を解放すれば良い。そう吹き込んだら先程言う通りに行動したわ。もう噛み殺されたかも知れないわね」

「馬鹿か。私達を殺しに来るぞ!!」

「大丈夫よ。その事については管理局と取引しているから。月島桜を態と私達に捕まえさせて、管理局が攻める口実を作り、戦いが始まったら解放して、後ろからターク家の部隊を潰すとね。貴方の始末は私達に一任されているから安心しなさい」

ゾンの右肩に優しく手を置く。モーンが円卓に上がり、ゾンの目の前まで来ると、しゃがみこむ。

「貴様等、ミットヴォツホが私に傷を付けることを許すと思うか」

「前線で戦うミットヴォツホが此処まで来れるとお思いですか？まあ、例え来れたとしても、彼はもうこの世には居ませんしね」

私の言葉でゾンの目が見開かれる。

「な、何を」

「貴方はモーンのアススキルについて何も知らないの」

私がモーンに目配せをすると、モーンは左腕をゾンの眼前まで伸ばし、手のひらを上に開く。手のひらから黒い鳥が出てくる。

「モーンは視覚共有する事が出来る鳥を生成出来るのよ。ミットヴォツホが殺されたのをモーンは鳥を通して見たの」

バン！！

部屋に唯一の豪華な扉が勢いよく開け放たれ、ボロボロのダッフルコートを来た女性が入って来る。

「レーヴェ・ヘルプスト、ただいま敗走して来ました」

獅子の爪を連想させる鋭いデバイスを展開した状態で両腕をブンブン振り回す。

「ヘルプスト、コイツ等を始末しろ！！」

チャンスとばかりにレーヴェに命令するゾンだがレーヴェは首を傾げる。

「何でアンタの命令を聞かなきゃいけないのよう」

「何！？」

「私は御姉様方の命令一筋だぜい」

自己主張の強い胸を張り、自慢気に言っ。

「ゾン兄様、そろそろさよならの時間ですね」

銃の引き金を引きながら言うが銃声のせいで、最後は聞き取れ無かっただろう。

デインンス・タークとモーン・タークはレーヴェ・ヘルプストを連れて、円卓に突っ伏すゾンが居る部屋を出ていった。

パーティーと言つ名のサボリ(前書き)

ゾンタークって日曜日なんだよ。どうしても良いけど。

パーティーと言つ名のサボリ

ターク家との戦争が終わつたある日。戦技隊全員がある広い場所に集まっていた。集まりの中心で哀れなモノ達を焼くような音が聴こえる。

ジュー、ジュー。

この場にいる全員が肉の焼ける音に心踊らせる。非人道的な火炎に焼けていく肉が悲鳴をあげる。身体やその中身、舌などが業火に焼かれ蹂躪されていく。ゾクゾクする。とつてもゾクゾクする。

隣で武器を構える部隊長『ツヴォルフ・ツヴァンツ』の存在が現状が重要であることを示している。

中央で焼かれていくモノ達とは別のモノ達を月島 桜がさばき、業火に放り込む。

周りには戦技隊の仲間が一步前に出るのを見て、レイアーノ・レクリエも前が出る。

ジュー、ジュー。

「皆さん、焼けましたよ」

桜の一声で男女問わず、金網に乗った焼肉に箸を伸ばす。誰もが一番デカイ肉を取ろうと互いに妨害し合う。

レイアーノも例外ではない。隣にいてであろう相手を前に出さないよう身体でブロックする。

「こつちも焼けましたよ」

5つある炭火焼きの上で次々と肉や野菜が焼き上がる。

1人で肉や野菜を焼く桜には申し訳ないがオレも肉が食いたいから手伝う事が出来ない。

取り皿に肉を乗せていくがある程度乗せたはずなのに、皿が重いと感しない。

その違和感にレイアーノが皿に目をやると、ちょうど取り皿から肉を摘まむ箸が見えた。

ギギギと音がしそうな位ぎこちなく首を回すとその箸の持ち主がツヴァンツ部隊長だと判明した。

「わざわざご苦労」

部隊長の威厳を感じる事が出来ない男が部下の皿から肉をくすねる。雰囲気どころか動きにも威厳がない。

「部隊長…」

レイアーノが睨みつけるとツヴァンツは箸を持つ手で自分の頭を小突いてテヘッと舌をペロツと出す。可愛い動作だが可愛くもな

い男がやるとイライラしてくる。

レイアーノが怒りで拳を構えるとツヴァンツは一目散に逃げ出す。あまりに情けない部隊長に呆れて怒りが何処か知らない場所にいつてしまった。

諦めて新しく焼き上がった肉を取りに行く。

それから暫くは肉の取り合いが続く。第一弾の肉が全て無くなると桜は新しい肉と野菜を投入し始める。

近くに少量の肉と野菜が乗った取り皿が置かれている。

新たに肉を確保したレイアーノは近くに備え付けられたベンチに座り、食事を始める。

うん、美味しいな。

コクコクと頷きながら黙々と肉を食らう。

周りも食事を開始する。皿の上を空にして肉が乗せられるスペースを確保するために。

先程の肉争奪戦が嘘のように和気藹々とした雰囲気話をしたり食べたりしている。

「いやあ、ターク事件の後にこんな休暇が待っているなんてな」

「本当。良いわね」

「皆、休みなんかね？」

隊員の話の話を聴いていると気になる事がある。今回の騒動でターク家は潰したが管理局も打撃を受けたのだ。残党が居るかも知れないのに休みつて……

「フッフッフ、諸君に教えてあげるよ。本来今日は普通に仕事があるのだよ…全員」

あるわけがないよな。

ツヴァンツの衝撃告白に隊員達が動きを止めて一斉に振り向く。例外は肉を焼いている桜と真つ当な休みではないと思っただレイアーノの2人だけだ。

「折角事件が終わったから皆で飲みに行こうとしたら、レジアスが全隊で事件後の報告や後始末についての会議を開くと言ってきたんだよ。何が悲しくてビールも飲まずに会議に出なきゃならないんだよ。だから今日の仕事を全部ゴミ箱にポイして焼肉パーティーを決行。レジアスが何を言おうが知らないよ。戦技隊に常識なんて通じるか」

握り拳を振り上げて堂々と言う。

「流石部隊長」

1人が声をあげると皆続き、拍手をしたり口笛を吹いたりする。

ああ、つまり…オレ達のがんきにパーティーしてる間、他の局員は疲れた身体に鞭打って、せつせと働いている訳だ。……ザマないな良かった、ウチの部隊長がはっちゃけてる人で。

レイアーノは桜が焼いた第二弾の肉を1人回収する。桜と目が合うとクスリと笑い、レイアーノはニヤリと笑う。桜が焼いた肉を皆が気がつく前に心行くまで堪能する。

「桜ちゃん、飲みましょ〜」

焼肉パーティー開始から何時間が経つと酒に溺れた奴等があちこちに現れる。

急に焼肉を口一杯に放り込む女性局員マキナ・テユナットウ。

絡み酒が酷い男性局員ムト・マンデー。

それを投げ飛ばす女性局員タナタト・ナナゼン。

缶ビールを両手に持ちながら桜を誘うマイクス・ヤマモト。ヤンワリと断り第七弾の肉を焼き始める桜。

くだらないやり取りを眺めながら缶ビールを飲む。

ニヤリと笑い空を仰ぎ見る。

ツヴァンツの威厳の無い顔が視界を覆う。

「飲んでるかな」

顔を無理矢理固定され、ビールを流し込まされる。
腕をじたばたさせるが全部飲まされてぶっ倒れる。

自由の代償（前書き）

何がしたいんだろうね。こんなことして。
本当にスミマセン。

自由の代償

焼肉パーティーの翌日。

レイアーノ副隊長及び副隊長以下の隊員は監禁され、拷問を受けていた。

精神を磨り減らす恐ろしい拷問の前に1人、また1人と倒れていく。レイアーノも例外ではない。今にも倒れそうな位にフラフラとしながら、自らに課せられた刑を消化していく。長きに渡り行われる拷問にレイアーノは遂に倒れ伏した。

「サボってんじゃねえ!!」

バアン!!バアン!!バアン!!

頭に強い衝撃が走り、レイアーノは強制的に覚醒した。

「寝かせるよ」

眠たげな声でレイアーノが抗議するが、赤毛の少女『ヴィータ』は手に持った身の丈程のハリセンでぶっ叩く。

「ウルセー!!アタシだってこんなくだらない事したくないんだ!!」

ヴィータは怒り浸透の顔で叫ぶ。

タク事件の後の忙しい時に無断で休暇もといサボリをした戦技隊は現在、ヴィータの監視の下で事件の始末書やサボリの反省文、今まで溜め込んだ書類の処理を日が出る前からしている。監視役のヴィータも同じ時間から日が傾き沈む今まで拘束されると言うとはつちりを受けていた。

「強制労働反対」

「時間外労働反対」

「人権侵害」

レイアーノを筆頭に文句を口にする管理局内の不良集団は朝から幾度となく脱走を繰り返してヴィータを疲弊させて来た。お陰？で何名かが戦線を切り抜け脱走を果たした。

ヴィータもこれ以上の脱走は不味いとデバイスを全て没収。監視を座ることから見回り方式に変更した。

脱走者を無くす成果はでたが今度は居眠りする者が続出した。

デスクに付して眠る者、背もたれに身体を預けて眠る者、一見真面目に取り組んでる様に見えるが手が全く動かない巧みに寝ている者ハリセンでいちいち対応しているが居眠りが減らない。そろそろグラーフアイゼンを使って殺ろうかと内心考えている。

唯一この無法者集団を統率出来る桜は前日ボイコットした会議に行く部隊長ツヴァンツの護衛兼秘書として同行してこの場には居ない。今、此処は無法地帯になっていた。

「うーん……よし、帰る」

「させるか!!」

椅子から立ち伸びをしたレイアーノはいきなり部屋の出入口にダッシュするが、ヴィータの足掛けの前で地面に頭をぶつける。追い討ちとばかりにハリセンラッシュを集中的に頭にくらい、動かなくなる。

「」「副隊長!!」「」

居残り組が立ち上がり、レイアーノを介抱する。

「オマエ等、とっととやれよ」

脱走の時には互いを押し退けながら逃げようとしたのに、こういう時だけ仲間意識を全面に押し出す居残り組に対してヴィータは疲れた様に言った。

「こんなにポロポロになるまで頑張った『副』隊長を血が出るまで……貴女は幼女の皮を被ったベルカの騎士よ!!」

「『副』隊長、起きて…起きて…！」

マキナとタナタトがやたらと『副』を強調しながらヴィータを批難する。

マキナがレイアーノから出たであろう血を指差す。

それを見るヴィータの目は冷たい。マキナの制服のポケットからケチャップと思われるモノが入った入れ物がはみ出しているから。

ヴィータの後ろではソロリソロリと出入口に向かうムトがいた。

あと少しで脱出出来ると一気に駆けつけた瞬間、出入口の横の壁に顔を激突させた。

「い・い・か・げ・ん・に……しろよ、オマエ等」

セットアップしたヴィータがムトの頭部をグラーファイゼンで殴りつけたのだ。

「もう限界だ、アタシは」

気のせいだろうか、ヴィータの口から煙が出ている。

異常に気がついたのか、レイアーノは死んだふりを止めて急いで徒手空拳を構える。

「やり過ぎたか」

「やり過ぎましたね」

「やり過ぎちゃいました」

レイアーノ、マキナ、タナタトは冷や汗をかきながら、どうしようもなく嫌な予感がした。
彼らの手にデバイスは無い。

「オレ達は負けない」

レイアーノは握り拳を作る。

「自由を勝ち取る」

左右にいるマキナ、タナタトにアイコンタクトをする。
2人は頷き、構える。

ムトも復活して、ヴィータの後ろで構える。
他の居残り組も各々が戦闘体勢を取る。

「突撃！！」

レイアーノの叫びを皮切りに居残り組総勢28名がヴィータを取り抑えようと駆ける。

ヴィータはグラーフアイゼンを構える。アイゼンからは薬莢が数発飛び出す。

「ブツ飛べエエーッ！」

後日、戦技隊の事務室を半壊させたとして居残り組（脱走者も含め）とヴィータに重い処分が課せられ、一時戦技隊は機能しなくなった。ヴィータは八神家全員に怒られまくった。

料理を始めたらいつまでか（前書き）

とりあえず考えがまとまるまでこんな感じ。

料理を始めたらどうでしょう

自由とは何か？

何を自由と言うのか。

例えば、ある夢の国で「自由に遊んで良いよ」と言われるとする。

これは自由なのか？

人それぞれかも知れない。

自由である、自由でない。

少なくとも自由ではない。

遊ぶことを強要している。

様々なアトラクションでしか遊ぶことを許されていない。

夢の国で野球をしている人が居たら？

係員が駆けつけて、その人を止めるだろう。

彼は自由に遊んでいるだけだ。

もし自由に遊んで良いなら夢の国で野球をしてもいいはず。

許されないのは自由ではないからだ。

この場所ではこう『遊ぶ』と定められているからだ。
強制された『遊び』を自由と勘違いしている。
場所やものに支配されているのだ。

地獄の様な数の書類を3日掛けて処理したレイアーノは本日、訓練場に足を運んだ。

暫く書類は見たくない。

彼の切実な思いが訓練場へ向かう原動力になっていた。

訓練場に着くと大小様々な屍が転がっていた。

皆、胸が上下しているのを見ると屍でないことが判断出来る。

「鬼だな」

ポツリと呟き、解放された空を見上げる。雲一つ無い青空に一カ所だけ白い色が浮かんでいる。そんな白い色に突撃する局員達。ピンクの魔力弾に撃墜されていき、地に墜ちる。最後まで残った勇敢な局員も無慈悲な砲撃の前に散っていく。

…まあ、消滅はしてないが。

空に浮かぶ鬼…と言うよりは鳥は恍惚の表情を浮かべている。

高町なのは…やだな。

レイアーノは回れ右をしてダッシュで立ち去ろうとしたが、誰かに右肩を捕まれ逃げることを封じられた。

「高町」

ボソツと右側で呟かれる。

気づいたら右腕を鷲掴みされている。

誰かなーっと右を向けば、杭打ち機型デバイスを展開したハグルト・フリーリングが空のなのはを嬉々とした表情で見つめていた。

「なのはアアアアツ!!」

絶叫と共にレイアーノの身体がもの凄い勢いで地面から離れていく。

ハグルトがレイアーノの右腕を掴んだまま飛び上がったのだ。

「ちよ、オマ、てえ放せよ!!」

突如、レイアーノは身体がグンと引つ張られ、腕を掴まれる感覚が消えた。

分かりやすく言うとレイアーノは投げ飛ばされたのだ……なのはへと。

「マジかああアアア!!」

飛ばされて来るレイアーノに対して優しく受け止める…なんてなのはの頭には欠片も無い。ただ、レイジンググハートを構える。

「デイベインバスター」

「させるか!!」

凶悪な砲撃魔法を防御魔法で受け止めようとしたが、防壁を紙の様に破られ墜ちていく。

「酷いですね、貴女は」

「ハグルト君の方が酷いよ、絶対」

ハグルトとなのはは睨み合う。

「空は私の領域だよ。何で居るのかな」

「貴女の領域ではありませんよ」

ハグルトがパイルバンカーを構えて突っ込む。

対するなのははシューターを連射する。

魔力弾を潜り抜けてパイルバンカーを打つ。

なのはは障壁で受ける。

「ぶち抜け！！」

バリアブレイクの掛かった杭が飛び出し、障壁を貫く。

障壁が破られる瞬間なのはは身体を横にずらす。そうすれば点の攻撃は簡単に避けられる。

徐々にヒートアップしていく闘い。熱く熱く熱く。

2人が何度目かの接近を果たそうとした時に巨大な電撃がその進路を遮る。

「いい加減に……しろ！！」

先程、撃墜されたレイアーノがデバイスを振り回しながら上昇してくる。

レイアーノの参戦により三つ巴の闘いが始まった。

昼下がりのオープンカフェ。

ある1つのテーブルに一組の男女が対面していた。

ジェイル・スカリエツティと月島 桜だ。

「美味しそうですね、それ」

イチゴパフェをつつきながら向かいの男の前にある今日のマスターのオススメを見た。桜の目にはマスターのオススメがただの Pasta にしか見えない。

「オススメだから頼んでみたが、特に美味しい訳ではないな」

クツクツと笑うジェイル。目の前にいる桜に対して偽名を名乗ったので、今は『ジル』だが。

「オススメの魔力に騙されましたね、ジルさん」

「まあ良いさ。次に頼まなければいいのだからね」

次元犯罪者と管理局の凶犬が和気あいあいとした雰囲気話している。

理由は簡単。互いに気がついていないから。桜はジェイル・スカリエッティの名前は知っているが、顔を知らない所以で目の前の人物が次元犯罪者だと気づいていない。ジェイルも桜の事は聞いたことがあるが、自己紹介の時に桜がファミリネームを言わなかったことと、眼鏡を掛けて肩口まである淡い桜色の髪を後ろで束ねていることで気がついていない。

「ところで」

パスタをフォークに巻き付けながらジェイルは話します。

「天才は孤独だと思わないかい？」

「天才……ですか？」

「そう、天才だよ。彼等は何かしらの分野において凡人の数倍も先にいる。素晴らしい技術、誰も考えつかない発想力。凡人は敬意と恐怖を彼等に向けるだろう。それは天才と凡人に見えない境界線を引く。スタートラインは皆同じはずだった。成長と共に頭角を表し、気がついたら隣に並び立つ者達が誰もいない。後ろを見ても凡人達

は地平線の向こう側で腐っている。孤独だよ。皆追い付くことが出来ない」

一呼吸入れ、水を飲む。

「例え天才がわざとペースを落としても凡人のペースを下回ることも、同じにすることも出来ない。脳が次々構想するからね。止めることも出来ない」

ジェイルはわざとらしく嘆く。

桜は彼の言葉に目を閉じて暫く考える素振りを見せる。そして目を開けて答えを出す。

「料理を始めたらどうですか」

「はい？」

突拍子もない提案に無限の欲望ジェイル・スカリエッティも目が点になる。

認められない者(前書き)

短い。あと、やらかした気がする。

認められない者

最近ドクターがオカシイ。

最近ドクターが外出するようになった。

最近ドクターが研究所にキッチンを取り付けた。

最近ドクターが料理本とにらめっこしている。

最近ドクターが料理する光景を多々見かける。

最近ドクターが料理を持って外出する。そして満足して帰って来る。

最近ドクターがレリック確保に消極的だ。

最近ドクターが一枚の写真をニヤニヤしながら見ている時がある。

キモい!!

ジエイル・スカリエッティの変化に頭を抱えるクアットロ。

そんなクアットロを不思議に思うウーノがいた。

管理局を転覆させる。それを夢見て活動して来たが当のジェイル・スカリエツティが料理にはまって、停滞してしまった。クアットロとしては頭が痛い。

ドクターに何があったが知らないけれど困ったわねえ。

研究所内を歩きながら考える。

クアットロは戦闘機人として一種の誇りがあり、人間を下に見ている。彼女は管理局が世界を支配するのを理解出来ない。

優秀な戦闘機人に全てにおいて劣る人間。支配者として優れているのは戦闘機人だ。

クアットロは全ての人間を自らの支配下に置いて世界の舵取りをしたいと考えている。

生みの親であるジェイル・スカリエツティさえも彼女にとっては踏み台に過ぎない。

邪魔でしかないのだ。

何故、戦闘機人を量産しないのか？

何故、ターク家事件後のガタガタになった管理局を攻撃しなかったのか？

潮時かも知れない。もうドクターは必要ないかも知れない。

誰も居ない廊下でクアットロは狂気的笑顔を浮かべる。

「ククク、最高の出来だ。人生最大だよ。分かるかね、ウーノ」

「はあ？」

「そうかそうか。ちょうど良い、少し食べて感想を聞かせてくれたまえ」

パク。

「あ、美味しい」

「うーん。少し味が濃いかな」

昼間の公園で桜が評価をください。

「そ、そうかね」

ガツクリと頂垂れる天才ジェル・スカリエッティ。

今、2人でひとつのベンチに腰をおろしていた。間にはジェルが作ってきて、桜が味が濃いと一蹴した料理が置いてある。

1週間に一度行われるジェルと桜の夕食。文字通り外でなされるこのイベントにジェルは心を踊らせている。

あの言われた言葉をそのまま実行したジェルに桜は苦笑しながらも付き合ってきてもう2ヶ月が経つ。

さすがにお互いが相容れぬ関係であることに気づいたが、気にしないことにしている。

「来週までの課題ですね」

「私が管理局に捕まることがなければの話だがね」

「そのときは……ガンバ」

「そこは私が何とかすると言つべきではないのかね」

ヤレヤレとジェルは首を振る。

「無理。私、管理局の人ですから」

爽やかな笑顔で見捨て宣言をする桜。

ジエイルは苦笑して持ってきた料理を摘まむ。

言われてみれば少し濃い。

すぐさま脳内レシピの味付けの分量を減らす。

「お帰りなさいませ、ドクター」

研究所に戻るとウーノが出迎えてくれた。

「ああ、ただいま。クアットロの様子は？」

私が料理を作る様になってからクアットロが不審な動きをし始めた。何が目的かは大体分かるがね。私個人としてはクアットロの目的を素直に達成させる気はないので、あるモノを開発している。勿論、料理の合間にだが。ドゥーエに頼んで手に入れてもらった聖王のD

NAを使い。

「さて、来週こそ月島 桜に私の作品の素晴らしさを教えてあげようではないか」

高らかに笑うジェイル・スカリエッティにウーノは黙って後ろで控えていた。

荒廃の世界『ツアイト』（前書き）

原作が遠い。

「荒廃の世界『ツアイト』」

管理局が誇る次元航行船の1つ『スペリオル』
次元世界『ツアイト』の調査のために派遣された。

「艦長、ツアイトに到着しました」

スペリオルのブリッジに女性局員の声が響く。

「フム、ではハラオウン執務官。手始めに武装隊数名連れて現地の調査を頼みます」

次元航行船スペリオルのカイン艦長は隣に佇むフェイト・T・ハラオウン執務官にツアイトに行くことを命じた。

廃墟。前を見ても右を見ても左を見ても廃墟。ボロボロの建物に頭のない巨像。街灯は役目を忘れ、道路は歩く者を拒むかのように割れている。

地球とは比べられない位に荒廃した世界だな。

武装隊員6名を引き連れてフェイト・T・ハラオウンは現地協力者がいる場所へと向かった。

歩きながら街を見渡すが人の気配が全くしない。

この世界で一体なにがあったんだろう？

人々は何処にいったんだろう？

フェイト達は現地協力者が指定したとある廃ビルの中に入る。中は荒れ果てて原形を保っていない。そんな中でフェイト達を迎える男が1人。

首から懐中時計を下げた童顔の男であり高くない身長と相まってよくて中学生にしか見えない。

「貴方がクナ・デ・ツアイトさん」

代表でフェイトが問いかける。

「その通りでございます、管理局の使い方」

頭を下げて丁寧な挨拶をするクナ。

「今回はよろしくお願いします」

フェイトは手を差し出し、握手を求める。

しかし相手に握手という風習がないのか、フェイトと差し出された手を交互に見る。

暫く悩んだ末にクナはフェイトの手を握り握手をする。

固いな、クナの手。

握手しながらそんなことを思うフェイトは説明を頼んだ。

ツアイトに次元犯罪者が侵入して何か怪しいことをしてる。

クナは簡単に説明し始めた。

数百年前から廃墟と化したツアイトに異邦人が来て何か始めたことに疑問を持った者達が接触を図った。だが彼らが帰って来ない。土地を導く者の御言葉に従い、管理局の使い様に次元犯罪者をどうにかしてほしいと連絡。そして今に至る。

「それでは早速、貴方の言う次元犯罪者の所に案内してください」

「分かりました、管理局の使い様」

フェイト達はクナを先頭にビルを出る。

どこまでも続いて見える荒廃した大地を歩く。進むにつれ、風化した建物が視界に入る様になり、都市だった場所にたどり着く。

「此処はツアイトで二番目に広く発展していた都市です、管理局の使い様」

クナが両手を広げて説明する。

あれはああだ、これはこうだと、建物を指差しながら説明をし続けた。

早く次元犯罪者を捕らえたいフェイト達からしてみればたまったものではない。

夜になり街灯がない外は文字通り真っ暗になった。

「管理局の使い様、暗くなったので此処で泊まります」

背中に背負ったリュックからランプを取りだし、明かりを灯す。

「彼方のビルに行きましょう、管理局の使い方。あそこなら少しは寝やすいはずです」

そう言うとクナはランプを手にビルへ進み始めた。

「執務官、もしかして床で寝るんすか？」

フェイトの近くにいた男性局員が声を潜めて話しかける。

「仕方ないよ」

フェイトは諦めたように言う。床で寝たくないと心の中でもの凄く訴えているが。

「管理局の使い方、此方ですよ」

「今行きます。ほら、みんな諦めようよ」

フェイト含む現代っ子組は自分達より幼く見えるクナが凄いと思うことにした。

朝、フェイトは誰よりも早く起きた。

男女別々のフロアで寝たので床が固いこと以外に不満はなかった。

「ふ、んん」

睡眠で硬直した身体をぐつと伸ばしてほぐす。

フェイトの動きに気がついたのか武装隊員の女性が目を覚ます。

「おはようございます、執務官」

同じようにぐつと伸びをしながら女性局員はフェイトに挨拶した。

「んんー、リーナがいません」

辺りを見渡し、リーナと呼ばれるが居ないことに気がつく女性局員。

「先に起きてたのかも知れないよ」

フェイトと女性局員は別の場所で寝ていた男性局員とクナと合流する。

「ねえ、リーナ知らない？」

女性局員が問いかけても誰も知らないと言っ。

このまま居ても仕方がないのでクナを先頭とした集団はビルを出て進みだした。

左右にビルが建ち並ぶ道をひたすら歩く。

「おい、どうしたんだアリク？」

フェイトがその声に気がついて振り向くと、アリクと呼ばれた男性局員がある一点を見つめて止まっていた。

皆がつかれて同じ方向を見る。

「キヤアアアア！！！」

女性局員の悲鳴にフェイトはハッと意識を取り戻す。

視線の先には今朝見かけなかったリーナがビルの壁にはりつけにされていた。

両腕を地面と水平に伸ばされ、腕から手のひらまでに鉄パイプが刺さっていた。また腹部にも大量の鉄パイプが刺さっていて、血が地面に滴り落ちていった。

荒廃の世界『ツアイト』 続

「ぶっして」

フェイトはポツリと呟いた。

視線の先にはビルにはりつけにされたリーナと救助に向かう2人の男性局員。

隣には悲しみに顔を歪めた女性局員の二ナと心配そうに見つめるアリク。

「とりあえず鉄パイプを片っ端に抜くぞ」

「了解」

2人の局員はリーナの腹部に刺さった鉄パイプに手をかける。慎重に力加減をして、一本抜く。鉄パイプ越しに肉の感触が伝わる。その感触に2人の局員は顔を真っ青にしながら鉄パイプを抜いていく。

「絶対許さない。ぶっ殺してやる」

作業を見守りながら男性局員のトーマが呟く。小さい呟きだったがその場にいる全員に聞こえていた。

「殺すなんて……駄目だよ、そんなの」

トーマの呟きにフェイトが反応した。

命を軽んじる発言にフェイトはトーマを叱ろうと振り向く。

瞬間、爆発音が轟く。

フェイトも含め誰もが爆発音のした方向を振り向く。
先程までリーナに刺さっていた鉄パイプを取り除いていた2人の局員だったモノが落ちていく。

「それでも……殺しちゃあいけないなんて言うんですか、執務官」

「犯人は管理局の法で裁かれなければいけないよ」

トーマ、アrik、ニナの3人はフェイトの考えに賛同出来ない。仲間が3人も殺されたのだ、敵討ちを許されるはずだ。
それなのにこの執務官は法で裁くと言うのだ。

「執務官、アンタのやり方が理解出来ませんよ、俺たちには」

震えた声でフェイトのやり方を認めないと言うアリク。

フェイトからしてみれば、簡単に殺すなんて言う彼等が信じられない。例え残虐な犯行を犯した者でも更正するチャンスは与えられるべきだ。

真っ向から対峙する4人。雰囲気は仲間同士なのに一触即発状態だ。

「管理局の使い様、駄目です。お互いに傷つけ合ったら犯人の思う壺になるかも知れません。犯人をどうするかは見つけてから考えるではないのでしょうか。ほら、喧嘩なんてしていたら犯人が逃げてしまいますよ。ねえ、お願いします。とりあえず、我慢してくださいお互いに」

クナの長時間の説得の末に一行は溝を開けたままだが出発した。

「ねえ、クナ。どうしてツァイトは滅んでしまったの？」

変わらぬ景色に飽きてきた二ナが滅びの原因をクナに聞いた。

「そうですね。……ツァイトは数百年前に異次元の生命体の攻撃を

受けました」

「異次元から？」

「はい、異次元からです。奴等は殖民地を求めて様々な次元世界に侵攻する野蛮な生命体だったと記されています。私達の世界を狙った理由は私達の世界の技術レベルが奴等にとって危険なモノだったからです。まあ、奴等は危険と言いましたが、私達の技術は日常生活と自衛にしか使われていませんから関係がありません」

「ふーん。……技術力が凄いならどうしてこんななっちゃたの？」

荒廃したビル群を指し示しながら疑問を口にする二ナ。

クナは無邪気な笑顔で答えた。

「技術には危険が付き物です。私達の世界も例外ではありませんでした。戦争中、奴等の戦艦が撃った砲撃が運悪く重要な施設に当たってしまいました。その重要な施設はツアイトのほとんど全ての都市のライフラインを支えていたものでして、砲撃でエネルギーが不安定になってドッカーンです」

腕を大きく広げ、爆発を再現しようとするクナ。

「敵も味方もまきこむ大爆発。生き残ったのは極少数です」

少し陰りのある表情を見せて前に進むクナ。

それからは黙々と進み、皆疲労が出てきていた。

クナはフェイト達の様子を見て止まった。

「今日は此処までにしましょう。管理局の使い様もお疲れの様子ですし」

その場に腰をおろして、クナはリュックからブロック状の食べ物を出す。

「オイオイ、俺達はまだいけるぞ。それに日はまだ沈んじゃあいない」

天を指差しトーマが言う。

「とつとと犯人を見つけて八つ裂きにしてやらなきゃ気が済まない」

「なら大丈夫ですよ」

ニコリと笑うクナ。

「ア？」

トーマのみならず皆が疑問を浮かべる。

「犯人は逃げませんよ」

「何で、んな事が言えんだよ」

トーマは多少の怒りを含めて言う。

クナの表情が抜け落ちる。

「何でって、私が犯人だからですよ」

一瞬の出来事だった。

フェイト達の前にいたアリの背中から魔力刃が突き出したのだ。

高速でアリの接近したクナが左手を腹部に突き刺して、その手が

ら赤銅色の魔力刃が飛び出し貫通した。

義手のデバイスがアリクの肉を裂き、上半身と下半身を分断する。

「4人目ですね、管理局の使い方」

フェイト達は急いで距離をとり、デバイスを起動させる。

「私達を騙していたんですか」

フェイトは問いかける。最初から今まで全てが嘘なのかと。

「結構騙しました」

「結構？」

「はい、管理局の使い方」

クナは嬉しそうに頷いた。

「まず、クナ・デ・ツァイトではありません」

「そっから!？」

トーマは思わずツッコミをいれてしまいが、クナは無視する。

「本当はクナ・デイ・ツァイトです」

「ほとんどおんなじだな」

呆れるトーマ。勿論、クナは無視した。

「次元犯罪者なんていません。被害者も居ません。

それにツァイトが滅んだのは数十年前です。あとは……無いです」

「どういふことですか？」

バルディッシュを構えながらフェイトは聞く。

「ツァイトが異邦人に侵攻されたのは事実です。異邦人は時空管理局なんて大層な名前を名乗っていましたが」

クナは二ナ、トーマ、フェイトの順に目を向ける。

「彼等は立派な事を言っていました。私達の世界の技術を危険だと言って我々が責任を持って管理するって。後は語った通りの戦争ですよ。」

「嘘をつくのを止めてください。管理局がそんなことするはずがありません」

フェイトはクナの話をして嘘だと言う。

「管理局の使い様がどう言おうと勝手ですよ」

クナは左手の魔力刃を振り上げて走り出す。
狙いはフェイト。

自らの全力をぶつけようと刃を振りおろす。
しかし、刃はフェイトが居た地面に刺さる。
クナの視界に金色の何かが映り、身体の左側が軽くなって、前のめに倒れる。左手だけが振りおろすされた形で停滞している。

「クナ・デイ・ツァイト、貴方を逮捕します」

フェイトの声がある場に響き渡る。

荒廃の世界『ツアイト』 終（前書き）

減速、減速。

荒廃の世界『ツアイト』 終

次元航行船『スペリオル』内、フェイトは自分にあてがわれた部屋で考え事をしていた。

クナ・デイ・ツアイト。

彼の言う事を信じるならば、管理局がツアイトを滅ぼしたことになる。

でも、管理局がツアイトに攻めたって言うことはツアイトが危険な質量兵器を所持していたんだよ。

頭の中で管理局の正当性を訴えるフェイト。

ツアイトの技術は他の次元世界をも崩壊させる可能性が有ったんだ。

だから、管理局は次元世界を救おうと必死に説得したんだよ。

だけどツアイトは頑なに無視したんだ。

そして、質量兵器に手を伸ばして…… ツアイトは滅んだ。

クナはきつと勘違いをしてるんだ。だからあんな過ちを犯してしまっただよ。クナの心は見当違いの怒り。

何とかしなきゃ……！！

フェイトは決意し、勢いよく立ち上がる。

そして急いでクナが収容されている部屋へと向かう。

「ふざけているんですか、管理局の使い方？」

クナの怒りを含んだ言葉が小さな部屋に静かに響く。
クナの様子に構わずフェイトは力説する。

管理局はツアイトを救おうとしたと。

君を救ってあげるよと。

背後に控える二ナとトーマが冷たい視線を送っているが、フェイトは気付かず説得を続ける。

「私は管理局の駒にはなりませんよ」

「管理局はそんな事しないよ。ただクナに更正してもらっただけ。間違いに気づいてもらうために奉仕活動をさせるんだよ」

「呆れるほどのお花畑ですね、使い方」

首からさげる懐中時計がカチツカチツとクナの怒りを代弁するよう
に鳴る。

「みんなそうやって更正して立派になったんだ」

「すみません、取り調べ終わりました」

「犯罪を犯した事は悪いけど、罪を償おうとしないのはもっと悪いんだよ」

「寝ても良いですか？」

フェイトもクナも互いに会話が成り立っていない。

「管理局の使い様」

「何かな？」

互いに帰って来た2人は真面目な顔で向かい合う。

「よく、優しさは大事と言いますが、そんなことはありません。敵に対する優しさなんて付け入る隙を与えるだけですから」

「そんなことない。優しさは敵味方関係なく必要だよ」

「ああ、そう。なら、もう話す事ないです」

右手をヒラヒラと振って背を向けるクナ。

フェイトは悲しい顔でクナの背を見つめる。

心の整理がついていないんだな、と思い部屋を出る。

二ナとトーマにクナの見張りを任せて。

フェイトは船の現在地を知りたくてブリッジに顔を出した。

カイン艦長の席に行き、さっき貰ったクナについての報告書を渡す。

「艦長、ミッドまでどの位ですか」

「もうすぐだ、執務官」

2人は事務的な報告をして、別れる。

……爆発音。

次元航行戦が僅かに揺れる。

「状況は？何があった？」

ブリッジクルーに急いで問いかけるカイネ。

「な、内部で爆発です」

「場所は……く、クナ・デイ・ツァイトが収容されていた部屋です
！！」

「確か、そこにはニナとトーマが……」

ブリッジは報告が飛び交う。

フェイトは急いでさっきの部屋へ向かう。

部屋の前にたどり着くと目を見開く。

壁は崩れ、ドアは無くなり、誰の者か分からない焼けた肉片が散らばっていた。

正義を語ろう

「はじめまして、こんにちは。皆様ようこそ。第一回討論会へ」

部隊長ツヴァンツの声が戦技隊の部署に響く。

彼を無視して報告書を作成している隊員。

目は虚ろでブツブツ呟きながら手を動かしている。

「第一回目の議題は『なぜ報告書を作成しなければならないのか？』だよ」

誰にも相手にされず一人頑張るツヴァンツ。

「正義？」

真つ昼間の公園で月島 桜は聞き返した。そよ風で淡い桜色の髪が微かに揺れる。

「そう、正義だよ。この曖昧な言葉の意味を私は知りたい。何故？何故かと言えば、そこに疑問を浮かべたからだ」

上機嫌に笑う次元犯罪者ジェイル・スカリエッティ。何故かうキキしている。桜にはそう見えている。

何故上機嫌なのかと言えば、ここ暫くの間、ジェイルは研究（料理）に夢中になり、一度約束をすっぱかしたのだ。

約束をすっぱかされた桜はその日から2ヶ月もの間、ジェイルと会わないと宣言して実行。

ジェイルにとって地獄の2ヶ月が始まったらしい。

しかし今日、ジェイルは桜の許しを貰い、再会を果たす。

桜を見るなり真っ先に飛び付いてきたジェイルを桜は背負い投げをしたが。

「管理局風と言うならば、次元の平和を守るですね」

「あくまで表向きだがね」

「正義を語るのは難しいですよ」

「確かに。しかし、だからこそ疑問が尽きない素晴らしい言葉だ」

本当にほんとーに嬉しそうに桜の手作り弁当を食べながら喋るジエイル。

「食べながら喋らない」

ジエイルの行儀悪さを見てられない桜が注意する。

「君はどんな正義を語るのかな、桜？」

「私？……んー、正義になるかは分かりませんが、犠牲ありきの平和ですかね。

幾ら犯罪者を捕まえ更正させても、また繰り返すんですから。いっそのこと殺してしまえば良いと思うんですよ。

他人が何と言おうと関係ありません。犯罪者にも人権が有る？知ってますよ。知ってて殺してるんですよ。

倫理に反している？貴方は倫理を知っているの。

偽善者ぶってそんなくだらない台詞を言う人は奪われることを知らないんだよ」

「例えるなら、君のお友達かな」

「私の正義はね…」

高町なのははレイジングハートを手でクルクル回しながら話す。

「この何処までも続く青空を汚す奴を撃墜することかな」

ヒュン！！

レイジングハートの回転が風を切る。

「空はね、とっても綺麗で気持ちが良いんだ。そんな素敵な場所に犯罪なんか持ち込まれたら迷惑だよ」

レイジングハートを構え、魔法の言葉をささやく。

「デイバインバスター」

新しく隊に入った新人は隊長に落とされる先輩達を見て、逃げたいと思った。

「はやて!?!」

フェイト・T・ハラOWNは全速力で親友に突撃した。

「管理局の正義は間違っているの!?!」

ユサユサとはやての両肩に手を置いて揺さぶる。

「ちょ、フェイトちゃん。止め、激し…喋れ、…ええかげんにせ
ー!?!」

フェイトの手から脱出するはやて。

「で、何が言いたいんや」

「管理局の正義が間違っていないか知りたいんだ」

フェイトがそんなことを言いながらまた、はやての両肩に手を伸ばす。

慌てて距離をとるはやて。

「あんなあ、フェイトちゃん。管理局の正義が間違えてたら管理局は今無いで」

「でも…」

「前の事件で何があったか知らんけどな、犯人はみんなそんなことを言っつてウチ等の動揺を誘うんや」

はやては胸の前で両腕を組みフェイトに講義するかの様に言う。

「フェイトちゃんは正義はなんやと思っつ？」

「管理局が掲げる正義が本当の正義だと思っつよ」

「ちょっと違うけどウチも同じ思いや」

「正義……だと？」

対強行独立航空隊、通称『強空隊』の部隊長室でレルム・シュピーレンはいきなりの訪問者のいきなりの質問に、呆れた声を出す。

雲一つ無い青空の様な色の髪をうなじが隠れる程度の長さにした女性で、目の前の威厳ゼロの男を睨む。

「そう、正義とは何ぞや？正義を語る組織に居るとたまに疑問になつてね」

部屋の中を軽快に歩き回りながら再度質問するツヴァンツ。

「まあ帰れ、邪魔だウザイ消えろ死ね！！」

手近にあった分厚い本をツヴァンツに投げつける。

バシッ！！

「あぶないよ、レルム。君の最愛の夫が怪我したらどうするんだよ」

「喜ぶ。あと最愛の夫は何年も前に私の頭の中からデリートした」

「酷い!?!」

ツヴァンツは床に手をついてわざとらしく泣く。

「ああ、なんだったかな?……正義が何かだっけ?」

気にせず話すレルム。

「そ、どいつもこいつも正義なんて綺麗な言葉を掲げて行動するから、少し君の意見を聞きたくてね」

あっさりと立ち直りレルムに問うツヴァンツ。

「無限書庫に行け。今、私は休憩で忙しい」

「大変だね。で、どうかな?」

レルムの拒否をバツサリと切り捨てるツヴァンツ。

「まあ、アレだな。正義はワガママか何かだろう」

「みもふたも無い発言」

「黙れ不真面目!!……自分の我を通す時、正義と言葉を替える。そうすれば支持者を得られ、正当化される。つまり、正義は都合よく使う為の言葉に過ぎない」

「なるほどね。その意見に完全賛成は出来ないけど、君らしいね」

部屋の中央にある来客用のソファーに寝転がるツヴァンツ。

「正義とは、多数決で多い方の事を言う。いかに支持者を得られるかで正義か悪かが決まる。そこに真の正義はない。ただ大多数にとって都合の良いものが正義と名付けられる」

「いかにもオマエらしい」

「惚れ直した？」

キリッとした顔でくだらない事を言うツヴァンツの顔面に先ほどより分厚い本を投げるレルム。

追放者

「お帰りなさいませ、ドクター」

外出から帰ってきたジェイル・スカリエッティを出迎えるクアットロ。

ニヤニヤした笑みでジェイルに頭を下げる。

しかし、そんな事にも気づいていないジェイルは軽やかな足取りど研究所の奥へと進む。

馬鹿みたいに浮かれているわねえ、ドクター。これから何があるかも知らずに。

ジェイルの後に続くクアットロ。

後ろにガジェットドローンを何機か従えて。

ジェイルは自らの研究室に着くとまず、椅子に座る。そしてクルリと後ろを向き、クアットロと向き合う。

「もう少し穏やかに出来ないのかね」

クアットロの笑みを数段上回る笑みを見せる。

その笑みにクアットロは少しだけ後退りをしてしまう。

クアットロの行動に対してジェイルはクツクツと笑う。

クアットロは自分を笑うジェイルにイラつき、力強く一步を踏む。

「何の事ですかあ、ドクター？」

イラつきを抑えつけ、いつもの顔で会話しようとする。

「出来の悪い誤魔化しは止めたまえ。見てみると悲しくなってくる」

「……なら、単刀直入に言いますわ、ドクター。死んでもらいたい
の」

クアットロは片手をあげる。動作に反応して後方に控えていたガジエットがジェイルを取り囲む。

「フム、君が私を疎ましく思っていたのは分かっていたが……まさかこんな安易な方法を持ち出してくるとは」

残念だよ、頭に手をやりながらわざとらしく言う。

「この状況でよくそんな口がきけますねえ」

怒りで笑顔が崩れかかるクアットロ。

「何をしてもどうせ殺すのだろ。だから、あらかじめこんな物を用意した」

白衣のポケットから何かスイッチのような物を取り出した。

「爆弾のスイッチだよ」

「は？」

「ああ、別に研究所を爆破する気はないので安心したまえ。ただ私が爆発するだけだよ」

ジェイルは躊躇なく爆弾のスイッチを押す。

意味を理解したクアットロは急いで部屋の外へと飛び出す。

轟音。

爆発の衝撃で部屋にあった様々な資料は焼かれ、ジェイルを囲んでいたガジェットは消し飛んだ。

間一髪で逃げ出したクアットロも衝撃で壁に叩きつけられた。

「く……はあ……ドクター、道連れを。でも、残念だったわねえ」

起き上がる煤を払う。

通路の一角を見るとウーノが此方に向かってくるのが見える。

「クアットロ、どうやらドクターを殺したのね」

表情も変えずに淡々と言うウーノ。

「知っていたんですか、ウーノお姉さまあ。なら丁度いいわあ。ドクターが秘密裏に開発してたモノへと案内してください」

研究所のある隠し部屋へと案内されたクアットロは笑った。

目の前のガラス張りのポットに1人の戦闘機人が眠っている。

「この子は唯一の男性型の戦闘機人。ドクターが私とトーレの稼働データと聖王の遺伝子で造りあげたモノ」

ウーノが近くのパネルを操作するとポットから液体が抜かれ、開く。

戦闘機人は目を開く。
青と黄のオッドアイがクアットロを見つめる。

「ウーノお姉さまあ、ドゥーエお姉様を呼んでください」

クアットロは自分より少し高い戦闘機人の頭を撫でながら笑った。

走る走る走る走る走る。
地を蹴って走る。

目的地はあの公園。ジェイル・スカリエッティとお昼を共にする場所。

ジェイルから連絡が来た。
今から公園で会いたいと。管理局の存亡に関わる重大な話があると。
怪しい、たぶん罠。

彼は管理局に関心などないのだから。

走る走る走る走る走る。

ジェイルが仕掛けた罠だとしたらあまりに雑。
ジェイルの名前を使った何者かの仕業だ。

月島 桜は持ち前の脚力と持久力で公園まで駆ける。
周りにおかしく見られない様にバリアジャケットを展開して「私、
急いでます」とアピールする。

公園の入り口に着くと一先ず止まり、心を落ち着ける。
銃型デバイス『ラピエサージユ』を片手に持ちながら公園に入る。
中心まで行き、辺りを見渡すが人が居る気配がしない。

「罠ですね」

わざと声に出して相手の出方を見る。

暫くすると、公園の入り口から誰かが入ってくる。

始めは遠くて誰かは分からなかったが、相手が向かって来て距離が
縮まると、それがジェイルだと分かる。

「こんばんわ、ジェイル」

身体から力を抜き、表情を和らげる。

「こんばんわ、桜」

ジェイルは片手を上げて答える。

「それで、あまりにおかしい連絡を寄越して来たけど。この前の煮込み海鮮パスタの作り方？」

「確かにアレは美味かったが今日は違う話だよ」

へらへらと笑っていたジェイルが表情を真剣なモノに変える。
桜もまた真剣な面持ちでジェイルに近づく。

互いに抱き締め合える距離まで近づき止まる。

瞬間、ジェイルが後ろに飛び退く。
先ほどまでジェイルがいた場所には魔力刃を伴った槍が突きだされていた。

「やっぱり、ジェイルじゃありませんね」

手を軸に槍を回転させながら桜は警戒する。

「何故気づいた」

「煮込み海鮮パスタなんて作ってませんから」

パチパチと手を叩く音が閑散とした公園に響く。

桜は偽ジエイルを警戒したまま、音のした方に目を向ける。

手を叩きながら歩いてくるクアットロが視界に映る。

「はじめまして、月島 桜」

「誰？」

「別に誰でもいいですわ。これから貴女には死んで頂くんですから」

クアットロが右手を高々とあげると風景の所々がぶれて、無骨な機械『ガジエットドローン』が大量に現れる。

追放者 続

振るわれる赤。

鮮血を思わせる赤槍がガジェットを貫き、切り裂いていく。

「アシチ・マキリンゲ・フイール^下AMFの効果をもとしないなんて」

桜の戦いを離れた所から観察するクアットロは思わず声に出してしまふ。

「ただ、桜ちゃん。貴女が私に勝つことは出来ない。」

「桜ちゃん、どうして私達が貴女の前に現れたと思うかしらあ？」

槍を振るい敵を薙ぐ。

目の前に居ようが居まいが関係なく破壊する。

「フォームチェンジ、ツインソード!!」

手に持つデバイス『ラピエサージユ』の先端がスライドして半分位に短くなる。真ん中で分離して各々から鮮血を思わせる魔力刃が形成される。

「ハア!!」

両手に構えた双剣で舞うかの様に動き、ガジェットを蹴散らしている。

「桜ちゃん、どうして私達が貴女の前に現れたと思うかしらあ?」

戦いの最中、唐突に聴こえてきた問いかけ。

桜は僅かに思考してしまう。

何故現れた?

私を疎ましく思ったジェイルが抹殺命令を出した。

だとしたら偽者を用意せずに普通に来れば良い。いつもの様に接して、油断したところをグサツと。

そもそも誘いの内容が雑だし、偽者にしたって私との話に合わせてられる様にインプットするはずだ。

彼女の単独ならジェイルが気付く。

……………まさか。

嫌な考えに至り、動きが鈍ってしまつ。

鋭い爪が脇腹を掠める。

「チィ!!」

気付かぬ内に迫っていた偽ジェイルに刃を振るつ。

「桜ちゃん、もしかして考えちゃったかしらあ」

喋るな、気が散ります!!

「ジェイル・スカリエツティはもう居ないつて」

そんなはずは……………ない?

気が付けば身体が止まっていた。

「ジェイル・スカリエツティは死んだんですよあ」

「……………そんな」

敵が目の前にいるのに腕がだらんと下がっていた。

ジェイルが死んだ!?

何で?

何で?

何で? 何で? 何で?

どうして?

気付けば地に倒れ伏していた。

何か声が聴こえる。

……………。

……………。

……………。

……………あ。

……………あ……………あ……………。

あ……あ…… ああ……。

ああああああああ！！

アアアアアアアアアア！！

素晴らしい効果ね。

手に持ったロストロギア『インフトライク』を撫でる。

インフトライク。

使用者の声を対象に浸透させるだけのロストロギア。ただ淡々と述べる事を相手に深く浸透させて信じさせる。

「さようなら、桜ちゃん」

クアットロはガジェットに指示を出して桜に止めをさそうとする。

アアアアアアアアアア！！

突然の雄叫び。

発信源は地に倒れ伏す桜から。

「な、何！？」

突然の咆哮に自然と後退るクアット口。知らぬ間に恐怖していた。

咆哮が止まった時、桜の身体が跳ね上がり、手近のガジェットが切り裂かれた。

「エへへへへへへエ！！」

イカれた笑い声を発しながら桜はガジェットを切り刻み始める。

「へへへエ」

ザクザクザクザクザク。

「エへ」

ザクザクザクザクザク。

機能停止したガジェットを何度も突き刺す。

あまりの光景にクアットロは指示を出すことを忘れてしまった。

「バケモノが!!」

偽ジェイルが桜の後方から攻撃を仕掛ける。

「エへへエへへへ!!」

偽ジェイルが鋭い爪を伴った腕を突き出すが、桜は背中を向けたまま跳躍をする。クルリと空中で身体を回転させ、偽ジェイルを飛び越える。飛び越えざまに偽ジェイルの突き出した腕を切り落とす。

「クッ!？」

片腕を切られた事により、偽ジェイルはバランスを崩し倒れる。

ドゥーエがやられた!？

クアットロは偽ジェルことドゥーエがやられた事により焦る。インフトライクで潰せるはずだった桜が狂った様に戦いだしたのだから。

身構えるクアットロ。

……………？

何時になっても向かって来ない桜にクアットロは疑問を浮かべる。

少し近づき様子を見ると、桜は倒れたまま動かなくなっていた。

「……………ハハ」

「アツハハハハ」

人間の癖に、少し驚かされたわあ。

クアットロは額の汗を拭い、隻腕のドゥーエに指示を出す。

止めをさせと。

クアットロの指示は複数のカラスの鳴き声で遮られるが。

カー、カー、カー、カー。

人気の無い公園に黒い来訪者が集まっていた。

全羽がクアットロとドゥーエを見つめていた。

「何が
」

何があったんだと、言おうとしたドゥーエがぶっ飛ばされる。

「公園は憩いの場よ」

ドゥーエの腹部に思い切り蹴りを叩き込んでぶっ飛ばした人物は蹴りを突き出した体勢で注意する。

追放者 終

公園に現れたカラスの群れと蹴りを放った体勢で待機している女性。

「憩いの場に争いを持ち込むなんて、何を考えているのかしら？」

黒いパンツスーツに青いコートを羽織った女性が足を引つ込めながら言う。

「あらあ、誰ですか？」

予想外の乱入者に内心焦るクアット口。悟られないように余裕を装う。

「誰？誰でもよろしいのではなくて」

青いコート of 女性はクアット口の焦りに気づいているのか、胸の下で腕を組み余裕を見せる。

「別に貴女方に用事は有りませんから安心なさい」

念話で呼んだのか、彼女の背後から黒服の男達が現れ、倒れ付す桜

を持ち上げる。

「では、ごきげんよう」

青いコートの女性は黒服の男達を従えて公園を後にする。

持ち出したガジェットを全壊させられたクアットロとドゥーエに青いコートの女性を追いかける気力はなかった。

「ディーンズ様、どうぞ」

公園の外に出た青いコートの女性、ディーンズ・タークを迎えたのは黒い乗用車と後部座席の扉を開いて待機する黒服。

「し」苦勞」

後部座席に乗り込んだディーンズは運転席に座る黒服に病院に行くように指示を出す。

「ディーンズ、奴等が帰った」

デインスの隣に腰をおろすコートが赤色であること以外瓜二つの女性、モーン・タークが抑揚なく報告する。

先ほどのやり取りを自らが生み出した視覚聴覚を共有出来るカラスを通して見ていたのだ。

「まあ、手負いで向かってくるはずはないわね」

月島 桜が負傷。

戦技隊にその報告がなされたのは桜がミッドの病院に運び込まれてから1日経ってからだ。

部隊長のツヴァンツは隊員を全員（非番を含め）召集。
慌てふためく隊員を黙らせながら説明した。

「犯人は分からないよ。病院まで運んでくれた人は公園で1人倒れている桜しか見ていなかったらしいから。と言うわけで、とりあえず様子を見に行くから君等はいつも通りにやってくれよ」

「で、何でついて来たんだレイアーノ？」

「副隊長の務めだ」

「タメ口！？」

ツヴァンツとレイアーノが病院内を歩き回る。

「部隊長、桜の病室が何処か知ってんのか？」

「知らない！！」

「馬鹿だろ！！」

「五月蠅い。行くよ」

五月蠅くならないように喧嘩しながら2人は桜の病室にたどり着く。
扉をノックして部屋に入る。

中にはベッドの上で静かに横たわる桜とその周りに高町なのは、リ
インフォース・ドライ、レルム・シュピーレン、ターク姉妹が居
る。

「容態は？」

ツヴァンツは周りに問いかける。

「外傷は特に問題ないようよ」

答えるのはディーンズ。

「精神干渉型ロストログアにやられた疑いがある」

モーンが補足する。

「どうする？戦技隊に穴がきたぞ」

レルムが戦技隊の危機を指摘する。

「とりあえず代理で場を繋ぐよ」

いつの間にか持っていたラピエサージユで殴る。

殴る殴る殴る殴る殴る殴る。

「また、そうやってお母さんを殺すの？」

黙って！！

「いつの間に身勝手な子になったの」

違う！！あの時はお母さんが悪いんだ。お父さんが死んだ後、いつまで経っても過去にすがって。私を放っておいて！！

辛かったんだ。ずっと過去の生活を1人で再現するお母さんを見ているのは。

苦しかったんだ。家に帰っても私を迎えてくれなくなって。1人暖かい家庭から閉め出された気がして。

「助けて」 「命だけは」 「人殺し」 「管理局の犬が」 「殺してやる」 「悪魔」 「死んでしまえ」 「許して」

暗闇から大量の人間が現れる。桜を取り囲み近づいて来る。

違う………違う………違う！！

違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う。

迫り来る人の壁をラピエサージユで切り裂く。

何度も何度も何度も何度も。

斬っても斬っても迫り来る。

抵抗虚しく人の波に飲まれ、身体を引つ張られる。
指が裂け、腕を折られる。

桜は叫び声をあげられずに過去の亡霊達に飲み込まれる。

管理局最強と赤青色の獅子

あの日から、月島 桜襲撃事件からすでに1年が経過した。人によつてはまだ1年しか経過していないと言っただろう。

1年で様々な事が有った。

ツヴァンツ・ツヴォルフ率いる特殊戦闘技術強行隊が活動を停止して、特殊戦闘技術教練隊に名前を変えた。名前の通り、戦闘技術を教える部隊になった。戦技隊に所属していた元犯罪者達の技術やそれの対処法を教えるつまらないモノになってしまった。

ただ、ツヴァンツ・ツヴォルフに何かしらの考えがあるのだと思いたい。

陸のエースの負傷を理由にレジアス・ゲイズが新たな政策に乗り出した。質量兵器の復活と都市防衛兵器「アインヘリヤル」の製造及び配置。

レジアス・ゲイズの政策は魔導師の優位を脅かす脅威になる。力持つ者の優位が崩されてしまう。

魔法至上主義の局員数名が管理局を抜け出し、新たな組織を作り出した。

自由と平和を謳う正義の組織。やっている事は犯罪者を保護して平和の為に働かせる事。

戦技隊の劣化版だと俺は認識している。

その離反した管理局達はかつてターク家が支配していた危険区域を根城に活動している。

管理局はそのうち彼等を潰しにかかるだろう。

八神はやても自分の部署を作る準備をしている。

なのはがまた誘われたらしい。俺には誘いが来ない。まあ、仕方ないのだが。

『鬼道さん、今回の任務は簡単です。先行した第33陸士部隊の援護です。頑張ってください』

一面に青空が広がり、少し冷たい風が身体を抜けて行く。視線を下に向ければ、細々した建物が幾つも見える。

『ヴァイス・レーゲン、砲撃準備』

『オーケー……レディ』

俺の念話に大剣型デバイス『ヴァイス・レーゲン』はぎこちない念話で応える。剣全体が左右にスライドして中から細長い砲身が現れる。

『チャージ』

砲身に金色の魔力が集められる。

俺の視界に豆粒以下の何かが見えた。

『デイスチャージ!!』

俺の念話と共に砲口から黄金の魔力が解放たれる。

流れ星を思わせる魔力は地上に着弾して、そこに居る人々をふきとばす。

砲撃が地上に着弾するのを確認すると、高高度からの自由落下と飛行魔法の推進力を加えて、地上に突撃する。

空からの攻撃に混乱する者達が居る地上にスレスレで制止する。

「いきなりだが、管理局第1独立突撃部隊隊長、鬼道 暁だ。投降しろ」

大剣型デバイスを肩に担ぎ投降を促す。

「投降？我々はミッドチルダの未来のために戦っているのだ。投降などしない」

集団の中に周りと違う服を来た男が暁を指差しながら言う。
彼の周りにいた魔導師達が次々に魔力弾を放つ。

「交渉決裂だな。……交渉してないが」

迫り来る魔力弾を一瞥した暁はその場から姿を消す。

「き、消え」

消えた、その言葉を言い終わる前に集団の1人が近くの壁に叩きつけられて動かなくなる。

仲間が叩きつけられた事に気付く前に1人、また1人と倒されていく。

わずか十数秒でリーダー以外の仲間が倒される。

「後はお前だけだ」

リーダーは背後から聞こえる声を最後に意識を失った。

「相変わらず速いです」

第33陸士部隊に犯人達を引き渡していると、金髪ツインテールの女性が寄ってくる。

「流石、管理局最強です。ですので次の仕事です」

「容赦が無いな」

たった今終わったばかりなのに、またすぐ仕事とは。

「内容は？」

「ロストロギアの不正売買の取り締まりです」

「何で俺が」

「戦技隊の在り方が変わって、現場に出なくなったから、一番勝手が利く私達に回ってきたんです」

戦技隊がいかに働き者達の集まりだったかが分かった気がする。あ

と、ありがたみも。

ミッドチルダ某所。

薄暗い街の中で乾いた破裂音がところ構わず鳴り響く。

2つの集団が公道で堂々と銃撃戦を行っているのだ。

片や『打倒、新旧管理局』と書かれた布を頭に巻いた『パンプキン・ボマーズ』と呼ばれる反管理局テロ組織。管理局に管理された様々な世界を解放するために集まったサラダボウルで周りの次元世界が頼んでいないのに次元世界の解放を目指していた巨大組織。
現在はただのテロ組織になってしまったが。

対するは黒服に身体の何処かしらに赤もしくは青の装飾品を着けた集団。名を『赤青商会』と言い、キャンディーから他人の生命までを売買する非合法組織。

「ターゲットには当ててるなよ」

「片っ端から撃ち殺せ」

互いに悲鳴と怒声あげながら撃ち合う両陣。

パンプキン・ボマーズが秘密裏に運んでいたモノを赤青商会が狙って起こった争いで奇襲を仕掛けた赤青商会に傾いていた。

さらに戦局を赤青商会へ傾ける存在がいた。

鋭く凶悪な爪でパンプキン・ボマーズの構成員を引き裂き、戦場を縦横無尽に駆け回る獅子が。

左右非対称に赤と青が混ざりあった歪なダツフルコートを羽織った女性で、肘まで覆う手甲に獅子を思わせる爪が備え付けられたデバイスを展開している。

「ガアアアアアア！」

咆哮と共に振るわれる爪が敵の肉をバリアジャケットごと切り裂いていく。

驚異的な脚力で戦場を引つ掻きまわされ、パンプキン・ボマーズは冷静さを欠いてしまう。そこを攻める赤青商会に構成員達は倒れていく。

残った構成員も獅子の爪に裂かれて血の海に沈む。

「マスターヘルプスト、物の確保が終了しました」

獅子を具現化した女性『レーヴェ・ヘルプスト』に報告する黒服。

後ろではアツシユケースを持った別の黒服が控えていた。彼等の周りには周囲を警戒する黒服達がいた。

「さて、中身が本物か偽物か見てみましょうか」

ニコニコと笑うレーヴェは黒服からアタッシユケースを受け取り、開ける。

「ホウホウ、御姉様方の求めるモノゲット!!」

中身に満足したのかアタッシユケースを閉めて、黒服に投げ返す。

その後、彼等はパンプキン・ボマーズの死体の顔を叩き潰して去って行った。

管理局最強と赤青色の獅子 続

ロストロギアの不正売買の取り締まりを命じられた暁は現在、ミッドチルダの病院にいた。

院内を歩き周り、目的の部屋まで行く。扉の前に立つとノックをする。

返事が無いことを知っていたので形式的のノック。ゆっくりと扉を開け、中に入る。

中には清潔感のある白いベッドとその上に静かに横たわる淡い桜色の女性。

胸がゆっくりと上下に動き、微かに呼吸音が聞こえる。

月島 桜。

陸の部隊の1つ、戦技隊のエースで陸の凶犬と呼ばれるほどの実力者だった。去年、公園で何者かの襲撃を受けたらしい。らしいのは目撃者の証言しかないからだ。

どんな攻撃を受けたかは分からないが去年から現在まで目を覚ます兆候は見られない。

ふと、ベッドの隣に椅子を出して座る高町なのはが居るのを見つめる。

「相変わらず目覚めないのか、なのは」

「うん、起きないみたい」

「そうか、寂しいな」

自分が記憶している桜より、髪が伸びている。

長い時間が経ったんだ。

「なのは、もうすぐ昼だ。何か食べに行かないか？」

椅子に座るなのはの肩に手を置いて誘う。

なのはは頷くと立ち上がり、暁と一緒に桜の病室を出る。

暗い………暗いなあ。

何時間、何日経ったのかな？

毎日？の様に聴こえてくる呪い恨みの言葉。

肌に張り付いてくる血に濡れてべっとりとした手。

何度も身体を引き裂かれ、骨を破壊される。

彼等の私に対する怨念が凄まじいのだろう。

眠れない。

今の私に眠るなんてあるのかな？

何度心が折れそうになったのか？

……………ごめんなさい。

ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！！

だからお母さん、もう出てこないで。

皆もう構わないで。

苦しい寂しい痛い悲しい怖い。

助けて……助けてジェル。

助けてよ。

本当は生きてるんですよ。

助けてくれるでしょ。

怖いよ……………ジェイル。

「それで、何の用かしら」

後ろにトーレとウーノを控えさせながら、クアットロは目の前の人物に問いかける。

「商談ですか？」

問いかけに答えるのは、同性さえ魅了してしまうような美しい笑みを浮かべるディーンズ・ターク。
赤いコートが優雅になびく。

「この前、たまたま面白いシロモノを見つけまして。」

胸の下で腕を組み、隣に控える赤青が歪に混じるダツフルコートを着たレーヴェに目配せをする。
するとレーヴェはアタッシュケースを持ち上げ、開く。

「な!?!」

中にはレリックと呼ばれるロストロギアが納められていた。

「最近、このレリックを集めて回る組織があると風の噂で聞いたもので。……どうかしら?」

クアットロの顔をチラリと見るディーンズ。

「何がほしいのかしらあ」

「決まっているかと」

「金かしらあ? 所詮は人間ね」

「フフ、お恥ずかしい限りね」

2人の間でロストロギア『レリック』の不正売買が成立した瞬間だった。

「美味しいな」

「美味しいね、暁先輩」

病院から出た暁となのはは、互いに行ったことのない新しい料理屋を開拓した。

「ところで、暁先輩」

「おっ」

「今、何しているの」

「ロストロギアの不正売買取り締まり」

水に手を伸ばしながら答える暁。

「そういえば、リーンはどした」

いつもなのはと共にいる白髪の女性がないことを不思議に思う暁。

「リーンなら今日はずっと事務仕事だよ」

少し不機嫌そうになのはは言う。

「あかさ、あれ…えっと、タヌキの近くにちっこの居るじゃん」

「リーンフォース・ツヴァイ」

さらに不機嫌になったなのは。ぶっきらぼくに答える。

「そう、リーン・ツヴァイ。リーン・ドライと仲良いのか？」

なのはの様子に気づかない暁はのんきに言う。

「知らないよ、そんなの」

ムスツとしてそっぽを向くなのは。

それに気がついたのか暁がなのはの頭に手を伸ばす。

「何か嫌なことでもあったのか？」

自分に原因があるのも知らずに、なのはのおでこにデコピンを放つ。

「イタ!!」

デコピンされた場所を両手で押さえ、涙目で暁を睨みつけるなのはに、暁はくくつと軽く笑う。

「うっし、元気になったな」

いつものクールフェイスが純粹な子供みたく笑う。

なのははただ、顔が熱くなるのを感じた。

管理局最強と赤青色の獅子 終

鬼道 暁。

高町なのは、フェイト・T・テスタロッサ、八神はやて達の地球にいた頃の学校の先輩で、月島 桜とは幼馴染みの関係である。彼が魔法に関わったのは闇の書事件の時。ヴォルケン・リッターに襲撃を受けた時にSランク相当の魔力保有量を持つことが発覚。アースラに保護された。

その事件において魔導師としての道を歩むことになった。

戦闘スタイルはフェイトと同じ高速戦闘を得意とする。

一瞬の美しさ『刹那』に憧れを持っているが一度も実践したことはない。

「いる？これ、いる？」

「いらないんじゃないですか？」

2人の男女がそこそこ広い部屋で書類整理をしていた。

第1独立突撃部隊。彼等がいるのはそう名付けられた部署。

「鬼道はどうした？」

スキンヘッドのこわもての男がこの部屋にいるべき人物が居ないことを気にする。

「暁さんは非番です、部隊長」

金髪ツインテールの女性が書類整理に終われながらも言う。

「ふざけるな！！人手が足りないんだぞ」

「部隊長が道楽でこんな部隊作るからです！！」

「うるせえ、憧れだったんだよ」

握り拳を作り力説し始める部隊長（46才）

「昔から少数精鋭の最強部隊、非人道上層部に抗い善行をなす。あと、独立って言う言葉がカッコいい」

「だからって、たった3人はいです。人集まらなすぎです」

「子供の頃からだな、オレの周りに人が集まらないのは」

遠くを見ながらしみじみと語る部隊長。

「鬼道の奴は自宅か？」

「はい」

夜、要り組んだ街並みで一頭の獅子が地を蹴る。
鋭い爪が肉を削ぎ、獲物を死に追いやる。

「うわあああつ!?!」

次々倒れていく仲間恐怖した管理局員は惨状に背を向けて逃げ出した。

そんなぶざまな姿を見せる局員を獅子が見逃すわけもなく、瞬く間に追い付き、身体を引き裂く。

管理局を血の海に沈めた獅子、レーヴェ・ヘルプストは軽く伸びをする、その場を後にしようとする。

「は!？」

暗い細道から不穏な気配が漏れだしている。

私の危険察知能力が警報を鳴らしてるう。

レーヴェは爪を構え、暗い細道からの気配に集中する。

しばらく待っていると細道から鬼道 暁が姿を現す。

「管理局最強が出てくるかあ」

ヤバイな、強いの来たよお。

頭をガシガシとかきながら逃走経路を模索する。

「見つけた、犯人」

ボソツと呟く曉。気のせいか目が虚ろだ。
バリアジャケツトを展開して、大剣型デバイスを構える。

「君に、君に休暇を奪われた男だ！！」

ゾクツと感じた瞬間にレーヴェは右に飛び込む様にして避ける。すると風切り音と共に何かが通り過ぎる。

「ニヤア！？危ないい」

「知るか死ぬ死にさらせ」

レーヴェが頭上に爪をクロスさせ、迫り来る大剣を受け止める。

「オマエのせいでオレの休暇が台無しだ。」

大剣の柄を中心に回転を加え、高速で斬撃を繰り出す。

「オマエ、ロストロギアの不正売買してんだろ。狂言でも良いからやりましたって言え」

「理不尽過ぎる!？」

身体の捻りを加えた爪を突き出し、対抗する。

互いの凶器がぶつかり合い、何度も金属音が響き渡る。

武器のぶつかり合いだけではなく、拳や脚も繰り出される。

レーヴェのガードをすり抜けた暁の蹴りが腹部に刺さり、ブツ飛ばす。

それで距離が空くと2人は睨み合う。

腰を低くし、両腕を軽く広げて構えるレーヴェ。

対する暁は忍者の様に大剣を背中に構える。

しばらくの沈黙。2人は必殺の1を繰り出すタイミングを見計らう。

辺りは2人の呼吸音以外の音が無い。

脚に力を入れ、いざ飛び出そうとする。

「動くな、止まれ」

突如として響き渡る制止の声に2人のムードが霧散する。

暁の後方から管理局の制服に似た物を着た集団が現れる。

「神聖管理局かあ」

乱入者を一瞥するレーヴェ。暁から目を離すことはしない。

「見つけた」

レーヴェの後方から『打倒新旧管理局』とかかれた布を頭に巻いた集団が現れる。

「パンプキン・ボマーズかよ」

めんどくさそうに呟く暁。

急に見つめあう暁とレーヴェ。

「共闘しないい」

「共闘だ」

同時に放たれた言葉にお互い背を向け合い、それぞれ神聖管理局、

パンプキン・ボマーズに向き武器を構える。

「にげるぜい」

「戦術的撤退」

飛行魔法を使い、すぐさま逃げる管理局最強と赤青商会の獅子。

「……………」

誰もが啞然としていた。

出会いと事件と真相と

何十年前の話。

とある管理外世界の調査をしていた部隊から報告があった。

現地の生物に武装隊が全滅させられたと。

この報告を受け、管理局の上層部は援軍を送った。

結果は全滅。

姿形も分からない生物にその管理外世界を調査していた局員は恐怖した。

「と、言うわけだ」

「何がと、言うわけですか」

管理局本局の食堂の1つ。

私は目の前にいる人物と食事を共にしていた。

「つまりだな、その管理外世界の調査を邪魔する生物を討伐してほ

しいんだと」

「大変ですね」

かわいそうに大変な役割を担う奴が居るのだな。

「おまえだよ、おまえ」

はい？

「何をおっしゃるのかわかりません」

「大丈夫だ、すぐに分かる」

笑顔で語る男の顔面に拳を叩き込んでやりたくなった。

しばらくすると、知らない局員が私の前に来る。
どうやら観念するしかないらしい。

手を振って見送る男の顔面に飛び膝蹴りをぶちこんで、嫌々ついていく。

件の管理外世界を調査する次元航行船に強制転移させられて、現場に連れていかれる。

そして、武装隊をことごとく壊滅に追い込んだ生物の居る森の入口で多くの現地調査員が整列している。皆、入口の前に立つ私に敬礼している。

……私が死ぬこと確定したみたいな雰囲気作るな。

「貴様等、生きて帰って来たら覚えてろ」

わざとらしく、本当にわざとらしく大声で周りに聞かせる。

入口から日常的な歩行で侵入する。

下手に気配を消せば相手に殺してくださいと言ってるようなもの。挑発するようにわざとらしく音を出すのも同じ。

この方法には問題がある。相手によることだ。……大問題だ。

「面倒だな、サボるか」

手頃な岩に腰掛け、デバイスの中に格納していた小説を取り出す。

「自然に囲まれながらの読書。……贅沢だな」

しばらく、幸せな時間を堪能する。

このままだと逃亡することが最善だとおもってしまつので読書を中心して先に進む。

草木をかき分け進むと広い空間に出た。

ただ広い空間に出ただけならどんなに良かったか、巨大な何かが目

………終わつたな。

彼女の脳内データベースから『竜』という単語が出てくる。

黒い強靱な外皮に大木さえ易々と薙ぎ倒せそうな尾。爪は鋭く、翼は大気を震わせる。全体的に尖つた凶悪な見た目。

竜と目が合つた瞬間にデバイスを後方に投げ捨て、戦闘意欲が無いことをアピールする。

……。

……。

……。

「何の用だ管理局の女」

静かに口を開いた竜。

内心ガッツポーズをした私。

「上から言われて貴方の討伐に来ました。しかし、私どもが勝てるはずがありませんので武器を捨てた次第です」

ペコリと頭を下げ相手の出方を見る。

「普段の話し方で構わぬ」

まさかの気遣い!?

「それならば遠慮なくさせてもらおう」

私はその場に座り楽な体勢をとる。

竜は私の態度に何とも思わないらしく、目を伏せて私が何を言うのか待っていた。

「オマエの名前は？」

とりあえず初歩的な質問を投げ掛けてみる。
難しい質問をしたわけでないのに竜は困ったように唸る。

「知らぬ」

ただ一言。

「知らない？何故？」

「名前を必要としなかった。対話出来る者はこの星にいない」

残念そうに語る竜。

「代わりになんだが女、オマエの名は何と言っ？」

「私か、私は」

「コーヒーを頼む」

管理局の対強行独立航空部隊の事務室で部隊長レルム・シュピーレ
ンがなのはに要求する。

「あの、報告書作ってますから」

上司が相手なので恐る恐る言っなのは。

「なら構わない」

レルムは気にしたようも無く言っと辺りを見渡す。

「ドライはどうした？」

日頃からなのはを補佐するリーンフォース・ドライの不在を不思議
に思ったレルムは質問する。

「桜先輩のところですか」

「ああ、そう。先輩で思い出したが、この前オマエは管理局最強の

鬼道と飯に行ったそうじゃないか」

ギギギときこちなく首をレルムの方へ向けるなのは。クククと危険な笑みを浮かべるレルム。

「どどどど何処からそんな話を!？」

「この前、自分で言ってたのだがな。惚けて気がつかなかったのかで、どうだったんだ」

「それは、その、えーっと……………部隊長はどうなんですか、ツヴオルフ少将とは」

なのはは話題をそらすために大声を出してしまい、キヨロキヨロと周りを確認する。誰もいないことを確認してホッと胸を撫で下ろす。

「ツヴァンツとは離婚したから特に今は何とも無いな。もしかしたら復縁するかも知れないが」

遠くを見つめながら語るレルムの表情は明るくはなかった。

出会いと事件と真相と 続

十数年前。

病院内で新たな生命が産声をあげる。

天使の歌声と言う者がたまにいるが、ツヴァンツ・ツヴォルフは何とも思わなかった。自分の妻が産んだ生命の歌声に対して。

ギヤアギヤア鳴いてるな。

看護師がツヴァンツを呼びに来たので、ツヴァンツはゆっくりと後
に続く。

案内された一室にはベッドに横たわるレルムとその隣にスヤスヤと
眠る赤ん坊だった。

「元氣な女の子ですよ」

後ろに控えている看護師がツヴァンツに告げる。

嬉しそうな顔で生命の誕生を心から祝ってくれているのが分かる。

ああ、そう。

看護師が一人で嬉しそうに語ってくるのを無表情ながらに鬱陶しく
思う。

「席を外してくれ」

邪魔だから。

看護師が部屋から出ていくのを見届けるとベッドに近づく。

「どうだ、私達の子供だ」

ベッドに横たわるレルムがニヤリと笑いながらツヴァンツの反応を待つ。

「そつだな」

レルムよ、当たり前のことを聞くな。

「我等の子供だな」

愛の結晶と言うものか。悪くはない。

母の隣で安心して眠る赤子に手を伸ばすツヴァンツ。少しだけだが表情が柔らかくなっていった。

それからツヴァンツとレルムは子育てに追われた。何せ2人共子育てのノウハウなど無いド新人なのだから。母方の父、つまりレルム・シュピーレンの父親の助けを借りたのだが、ハッキリ言って役に立たなかった。

それでも四苦八苦しながらも愛情を注いで育てた。

「パパー」

公園のベンチでのんきに座っていたツヴァンツの腹部に愛娘のイーアがタツクルをかます。

「どうした？」

抑揚のない声でイーアに問いかけるツヴァンツ。腹部に抱きついた娘を抱き上げて隣に座らせる。

ツヴァンツの行動にイーアは頬を膨らませて抗議する。

「パパのお膝に座りたい」

何でだ？固くて座り辛いだけだが。

子供心が分からないツヴァンツは無表情のまま疑問に思う。

「ツヴァンツ、何意地悪してんだ」

ツヴァンツの後方からかけられる声。

「ママー」

隣のイーアがベンチから身を乗り出す。

「危ないぞ」

猫の様にイーアの首を掴み膝に乗せてやる。

まったく、大変だな子供は。

ツヴァンツは膝に乗せた娘の頭を撫でながら、隣に腰をおろしたレ
ルムを見る。

「ツヴァンツ、これが幸せだよ」

いつものニヤリとした笑みではなく、周りの人間には見せないニコ
リと柔らかな笑みを見せる。

「これが……幸せか」

「何だ………これは」

目に映る悲惨な現実にツヴァンツはポツリともらす。

人通りの少ない薄暗い場所でツヴァンツとレルムの2人が立ち尽くす。

周りには数名の管理局員が現場を調べていた。

「ツヴァンツ隊長、レルム副隊長、被害者の身体には無数の切り傷と刺し傷があります」

淡々と述べる局員にツヴァンツは何も返事が出来なかった。

「最近出沒する通り魔の仕業でしょうか。これで被害は四件ですね」

局員の1人が何か言っているがツヴァンツとレルムの耳には届かない。

ただ、壁に十字架ばりにされた愛娘を見つめるだけだった。

その後、ツヴァンツとレルムの捜査にも関わらず犯人は逃げ続けた。手がかりも何もないがむじやらな捜査は努力も虚しく彼等に何も与えてはくれない。

娘が死んだのは自分のせいだとレルムが泣き出した。それに対してツヴァンツがかけた言葉はたったの一言。

「別れよう」

感情のこもった決別。

「我が力及ばずオマエに傷を負わせてしまった。我が子を殺してしまった。あの日、2人を守ると契約したにも関わらず。我が大切と思える者はオマエしか居なくなってしまった。我が思いは1つ。オマエに傷ついて欲しくない。だから別れるのだ。我が罪として全てを捨てよう。オマエを守れるのであれば」

「全てを捨てよう。書類なんか見たくないしね」

デスクのところ狭しと積まれた書類に、ツヴァンツは名案と手を叩き立ち上がる。

「桜くんが居なくなってから書類の処理が面倒になったね」

コートを手に取り部隊長室を出ていく。

途中でレイアーノに出会ったので今日は用事で出かけると言って、ダッシュで逃げだした。

今日は天気が良い。

軽い足取りで街中を歩き、花屋で適当な花束を見繕ってもらう。

花束を大切に持ちながら目的の場所に向かう。

すでに先客がいるので歩調を速め。

街中から離れること二時間、自然の広がる場所に着く。

街にはない優しさを感じながら、ツヴァンツは此方を見つめる人物のもとへと歩いて行く。

出会いと事件と真相と 終

十数年前。

ミッドチルダのとある酒場で今宵、『ミーシャ』と呼ばれる集団が宴を開催していた。各々に並べられた料理を貪り、酒を煽る。

ミーシャのリーダー、マグトール・ミーシャもまた仲間と共に酒を飲んでいた。彼の隣には、この集団において異質な存在がいた。

名前をトルルト、まだ成人を迎えていない高々12、3の少年でミーシャにおいて最も若いメンバーである。

彼は兄貴分であるマグトールを尊敬していた。だから今回の宴に無理を言つて強引について来たのだ。

そして地獄に遭遇した。

陽気で明るい雰囲気を突如として現れた乱入者に破壊される。

店の入口からゾロゾロと武装した管理局員が入って来る。

「夜分遅くに申し訳ない、ミーシャの諸君。我々管理局は諸君等の行動に対して処分を下すことにした」

局員の先頭に立つ、無表情の男が淡々と述べる。

「諸君等を逮捕する。生死は問わない」

瞬間、男の後ろに控えていた局員達が動きだす。

誰もがデバイスを構え、武装もしてない無抵抗のミーシャの構成員

を攻撃し始める。

血を流しながら倒れていく仲間にとルルトは恐怖した。

マグツールを筆頭に生き残っている何人かが反撃するが、次々と倒れていく。

気づけばとルルト以外に動く者は管理局員を除いていなかった。

青空が広がり、自然が穏やかな雰囲気を作りだす場所で、2人の男女がポツンと存在する墓石の前で隣り合わせに立っている。2人の間に言葉は無く、風の吹く音と草木がザワザワと揺れる音だけが響く。

2人の前にある墓石には『イーア』とだけ彫られている。

男、ツヴァンツ・ツヴォルフは左手に持った花束を墓石の前に横にして置く。

彼の動作を静かに見つめているのはレルム・シュピーレン。

ツヴァンツが花束を置き終わって立ち上がると、レルムはしゃがみ込んで墓石を優しく撫でる。

「また1年経ったんだな」

撫でる手を止めずにレルムは呟く。声は何も彩りがされていない無機質なものだ。対するツヴァンツはいつもの威厳の欠片もない顔でただ笑っているだけだ。

「今日は命日だが、あの日の悲しみなんて感情はもう忘れた。薄情者なのか、私は」

「さあ？僕はそうは思わないよ。だって犯人が捕まっていないからね」

レルムの肩に手を置いてツヴァンツは言う。

「犯人が分からないか。つくづく出来の悪い親だな、私達は」

「だから今みたいになっただよ」

「あの日からずっとオマエは酷い奴だ」

「だから、お互いに潰し合うのかな」

「……やり直さないか」

「……いきなりどうしたの？」

「高町に言われた。ツヴァアンツとはどうなんだと。それに月島の件もある。どちらかが傷つき死に逝くのが怖いんだ。要らぬ心配かも知れないがな」

ツヴァアンツの正面に立ち、普段のレルムから考えられないほどの弱々しい声。

「やり直すことはできないよ。……別に君のことが嫌いと言う訳ではないし。ただね、顔も名前も知らない、娘を手にかけて犯人が君を傷つけるのではないかと思うとね」

軽い調子で語りながらレルムの目を見るツヴァアンツ。

「オマエは！……いや、私が性急過ぎた。すまない、自分の気持ちだけを優先し過ぎた」

レルムはキツとツヴァアンツを睨み付けたが、すぐに落ち込んだ感じになる。

「せめて……せめて、その、何だ、キ……」

「こんにちは」

ツヴァンツの瞳を見つめ、頬を赤らめながら何かを言おうとするレルムの言葉を第三者が中断した。

2人が声のした方に顔を向けると鋭い目付きをした長身の男が立っていた。

その男の周りにはバリアジャケットを展開した集団が控えていた。

「久し振りだな、ツヴァンツ・ツヴォルフ、レルム・シュピーレン。オレのことを覚えているかい？」

クククと笑う男。

「ある時は『オマエ達に滅ぼされた組織』の1人。またある時は『オマエ達の可愛い娘さんを殺した』犯人だ。思い出したかい？」

笑いながら嬉しそうに語る男。

それに反応したのはツヴァンツ。

「あの時の……あの時のガキか」

「正解！！あえて言うならトルルトって言うんだぜ」

ツヴァンツを指差しながら無邪気な子供の様に喜ぶトルルト。

「オマエが……イーアを」

「はい、殺しちゃいました」

レルムの言葉にテヘツと舌を出すトルルト。

「憎いか憎いかー、おい！！言っておくけど快樂殺人じゃねえぞ。復讐だよ、御二人さん。理由は最初に言ったぞ。思い出せるかな？」

手に持った杖型デバイスをクルクル回しながら語るトルルトはニヤリと笑いながら俯き肩を震わせるツヴァンツとレルムを眺める。

「思い出せるか思い出せるか？まあ、とりあえず、サヨナラだ」

トルルトの言葉を合図に後ろに控えていた20ばかりの魔導師がツヴァンツとレルムを中心に円を描いて囲む。

「昔みたいになつたな」

円から少し離れたところでトルルトは見学をする。これから起こる血に濡れた舞台劇を。

円が狭まり、魔導師達が各々のデバイスで攻撃を仕掛ける。

血飛沫が巻き起こる。降り注ぐ雨が円の中心にいる男女を赤く染め上げる。

ドサドサつと20もの首が空から落ちてくる。

ツヴァンツとレルムの周りには噴水とかした20もの首無し。レルムの右手には血に染まる連結刃の剣が握られていた。

「う…そ…だろ」

トルルトは今起こった事態を飲み込めなかった。

自分の連れて来た腕利きの傭兵魔導師が一瞬で全滅させられたことに。

目の前にツヴァンツが迫っていることに気づけないほどに心乱されていた。

「我が娘を殺した愚かしき者よ」

青姫と機人と強王と（前書き）

しばらくぶりの投稿です。自信も何も無い

青姫と機人と強王と

「どづいうことだアレは。聞いていないぞー!!」

ミッドチルダに存在する赤青商会。その一室で男の怒声が響き渡る。怒声を浴びせかけられるのは青いチャイナ服を着た女。男に対して営業スタイルを浮かべている。

「聞いていないと言われましても、私も知りませんでしたので」

悪びれる様子のない女は男との間に存在するテーブルの上の紅茶に手を伸ばす。

「ふざけるなよ、ディーンズ・トーク」

男は座っていたソファから立ち上がり、チャイナ服姿のディーンズ・トークに詰め寄る。

「ふざける？一体何のことでしょうか。私は貴方に腕利きの傭兵を提供しました。彼等の行く場所もお教えしました。それを駄目にしたのはトルルトさん、貴方ですよ」

営業スタイルから一転、ディーンスは紅茶を口に運びながらトルルトに冷ややかな視線を向ける。その視線に恐怖を感じたトルルトは無意識に一步、また一步と後退る。

それを見たディーンスはクスリと笑う。

「クッ！……オマエ！！」

ディーンスの笑みが癪に触ったのが、トルルトは逆上して手を上げる。

「下劣な男ね」

ディーンスは飲みかけの紅茶をトルルトの顔にぶちまける。

不意の攻撃に怯んだトルルトに、立ち上がったディーンスは相手の顔目掛けて回し蹴りを繰り返す。

「あがつ！？」

ぶざまに倒れ付すトルルト。身体を震わせながらも立ち上がることをする。それをディーンスが許すはずもなく、その首を踏みつける。何度も何度も何度も、トルルトが動かなくなるまで続けられた。

「誰か、このゴミの処分を」

部屋の外に待機していた黒服達に処理を任せると部屋を後にする。

戦闘機人又ル。

青と黄のオッドアイを持つ、ウーノとトーレの稼働データと聖王の遺伝子で生まれた存在。

今は亡きジェイル・スカリエッティによって秘密裏に造られたのだが、クアットロの手により稼働した。

そんな彼は現在、トーレと共に管理局員を襲撃していた。

夜空の中で不気味に存在を放つガジェットドローンが次々と局員を殺害していく。局員を円形で囲みこんで逃げることを許さない。

不意に又ルがガジェットドロンの攻撃を止めさせる。

無機質な瞳が唯一生き残った男を捉える。

攻撃が止んだことに男は疑問を浮かべる。しかし、けっしてデバイスを構えるのを止めない。杭打ち機型デバイスを構え直して辺りを見渡す。

「ハグルト・フリユールリング、もう勝敗が決まりました。武装解除しなさい」

淡々と話すヌル。身動きも瞬きもしない姿はロボットを思わせる。

「いつまでも貴方は願いを叶えることが出来ない」

「何の話ですか？」

「高町　なのは」

ヌルの口から出た名前。その名前はハグルトに関心をもたらした。

「レジアス・ゲイズでは貴方の願いを叶えることは出来ない。でも僕らなら叶える事が出来る」

ヌルの勧誘にハグルトは考える。

しばらく考えた後、ハグルトは答えを出す。夜空に光る星の軍団を証人に。

特殊戦闘技術教練隊、通称戦技隊の隊員は困惑していた。レイアーノは目を丸くして目の前の男を見つめていた。マキナ、タナタト、ムトの3人も同じ状況になっている。

彼等は部隊長であるツヴァンツ・ツヴォルフの変化にどうして良いのか分からなかった。

別に姿形が変わった訳ではない。雰囲気ガラリと変わってしまったのだ。威厳の欠片もない部隊長らしさの欠如した男が消え、そこには威圧的で王を超える何かを思わせる圧倒的な雰囲気醸し出す男がいた。目は鋭く、声には従うことに疑問を思わせない程の力強さが乗せられていた。

部隊長室にはツヴァンツから発せられる圧倒的な雰囲気溢れ溢れで、レイアーノ達は息苦しさを感じながら直立不動を維持していた。

「ティアナ・ランスター」

軽い呟き程度に囁かれた言葉が耳元で話されたように聞こえる。

「は、はい」

この部屋に場違いな声色が響く。怯えを含んだ返事をした少女、ティアナ・ランスターはビクビクしながら前に進み出た。

後ろから刺さる幾つもの視線に戦技隊に配属されたばかりの少女は手に汗握る状態だ。

ズズツとコーヒーを飲む音が響き渡る。

「オマエは一体何を失い、誰を殺した」

カップをデスクの上に置いたツヴァンツは椅子の背もたれに身体を預けながら問う。

凍結のお知らせ

この小説を読んでくださった皆様にお知らせします。

諸事情によりこの小説の更新をストップさせていただきます。

諸事情と言っても、ただどう展開すれば良いか忘れてしまっただけです。大問題ではありませんが、気にしないでください。何か頭がこんがらがっただけなので。ですのでこの小説を好んでお読みくださった方には申し訳ありませんが、更新をストップします。

代わりに別の作品を投稿しますので時間を割いていただけますならどうぞ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1283t/>

リリカルなのは 誰もが謳う正義

2011年7月19日10時49分発行